

千葉県八千代市

南谷遺跡発掘調査報告書

— 霊園進入路の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2009

宗教法人 信澄寺

八千代市遺跡調査会

凡 例

1. 本書は、千葉県八千代市保品字南谷に所在するに南谷遺跡の、平成6年度（a地点）及び平成9年度（b地点）に実施された発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、雲團進入路の建設に先立つもので、地権者である宗教法人 信澄寺の委託を受け、八千代市遺跡調査会が実施した。
3. 調査及び整理は以下のように実施した。

調査期間 平成6年6月6日～平成6年7月13日（a地点本調査）
調査面積 546㎡
調査期間 平成9年12月3日～平成10年3月31日（b地点本調査）
調査面積 309㎡
整理期間 平成21年4月1日～平成21年8月3日（本整理）
4. 確認調査及び本調査は森 竜哉、本整理については中野修秀が担当した。
5. 本書の図版作成は、中野修秀、植田正子、見神光恵、日向洋子・山下千代子が行った。
編集・執筆は中野が担当した。ただし、第1章第1節は森 竜哉が執筆した。
6. 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
7. 挿図の第1図の地形図は、八千代市発行の25,000分の1八千代市都市計画基本図を使用した。
8. 挿図の第2図の地形図は、八千代市発行の2,500分の1八千代市都市計画基本図を使用した。
9. 第1章第3節を中心とした、本文中に用いた「台」・「谷」・「支台」・「支谷」の名称は、「殿内遺跡」の報告書の中で正式に命名されたものを使用している。

森 竜哉他 2009「千葉県八千代市 殿内遺跡b地点」八千代市教育委員会
10. a地点の調査は、コンクリート杭を仮原点としている。諸般の事情により、調査中及び終了後に杭の標高を出すことができず、そのために水糸レベルを表記していないことを、予めお断りしておく。これによって生じる問題に関しては、諸賢の御寛恕を乞いたい。
11. 遺構№は、調査時の数字で表記した。遺構の内容や時期が異なる場合も、調査時点の№を使用している。
12. 各実測図の縮尺については、原則として下記のとおりである。これ以外は、適宜挿図中に示した。

竪穴住居跡1/80 炉跡1/40 溝1/100
13. 遺構実測図中のスクリーントーンは、特に指摘が無い場合は、以下のとおりである。

焼土範囲 粘土分布範囲 炉跡 カマド袖部
14. 遺物実測図中のスクリーントーンは、特に指摘が無い場合は、以下のとおりである。

赤色塗彩 スス・オコゲなどの付着範囲 砥石の使用面
15. 本文中の遺物解説で用いた記号は、以下のとおりである。

㊦ 外面 ㊧ 内面
16. 第3章第1節における「宮澤分類」とは、宮澤久史氏が「保品・神野遺跡群」の報告書を執筆した際に用いた、弥生式土器の分類のことである。この分類と位置付けに関しては、同氏に知的優先権が有る。ただし、今回、本報告書に掲載したことによって生じる問題に対しては、それを使用したところの報告者に全て責任が有るものとする。

宮澤久史 2004「千葉県八千代市 栗谷遺跡 -第3分冊-」八千代市遺跡調査会 他を参照
17. 発掘調査から整理作業の間において、以下の諸氏・諸機関に御指導・御協力をいただきました。記して感謝いたします。

千葉県教育庁文化財課 八千代市教育委員会 長田京子

目 次

凡 例

目 次

第1章 調査経過及び概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	3
第2章 検出された遺構と遺物	6
第1節 旧石器時代	6
(1) 調査区出土遺物	6
(2) 旧石器時代のまとめ	6
第2節 縄文時代	6
(1) 調査区出土遺物	6
(2) 縄文時代のまとめ	6
第3節 弥生時代	7
(1) 竪穴住居跡	7
第4節 古墳時代	10
(1) 竪穴住居跡	10
第5節 奈良・平安時代	28
(1) 竪穴住居跡	28
(2) 溝	28
第3章 成果と課題	30
第1節 弥生時代の様相	30
第2節 古墳時代の様相	30
第3節 奈良・平安時代の様相	34
報告書抄録及び要約	46

第1章 調査経過及び概要

1. 調査に至る経緯

平成6年4月、八千代市保品字南谷1246-2ほかの土地について宗教法人信澄寺 代表役員 林昭行氏（以下、「事業者」という）から霊園進入路建設に伴い、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が八千代市教育委員会（以下、「市教委」と略）に提出された。照会地及び周辺地は当時山林であり、遺跡範囲外であったため、試掘を実施した。その結果、住居跡の落ち込みを確認したため、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いにかかる協議を行った。事業者が工事計画を予定通り進めることを確認し、道路幅という制約があったため確認・本調査を予定することとなった。林氏から平成6年5月、文化財保護法第57条の2第1項の規定による土木工事の発掘届が提出された。調査は八千代市南谷遺跡調査会と事業者による委託契約を締結し、諸準備が整った平成6年6月、調査に着手した。

調査後、平成9年7月、林昭行氏から前回調査区の北側隣接地について、道路幅にかかる埋蔵文化財の照会が提出された。前回の調査結果により、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いにかかる協議を行った。工事を進める意志を確認し、確認調査を予定することとなった。林氏から平成9年10月、文化財保護法第57条の2第1項の規定による土木工事の発掘届が提出され、市教委、八千代市遺跡調査会、事業者の三者により調査にかかる協定を締結した。調査主体を八千代市南谷遺跡調査会から八千代市遺跡調査会に統一し、継承することとし、平成9年12月、b地点として確認調査に着手した。確認調査後本調査にかかる協議を行い、諸準備が整った平成10年3月、b地点本調査に着手した。

2. 調査の方法と経過

調査は、平成6年度（a地点）、平成9年度（b地点）の前後二回に分けた形で行われた。

基本層序 I層（表土）

II層（黒色土）

III層（立川ローム。ソフトローム）

表土除去は、a地点・b地点ともに重機を用いた。発掘調査工程の迅速化を最優先課題としたため、遺構確認面は原則としてIII層上面である。表土除去後、人力による遺構確認作業を行った。この後全ての遺構の精査及び掘り下げは、人力によるものである。

遺構の土層断面図・エレベーション図は、現地で水糸を張り、手実測で作成した。

遺構平面図の作成及び遺物の取り上げに関して、b地点ではトータル・ステーションを用いた。

検出遺構などの写真撮影は、モノクロフィルム・カラー・リバーサルフィルムとも35mmを使用した。

a地点は、平成6年6月6日より、バックホーによる表土除去を開始し、6月8日に終了した。

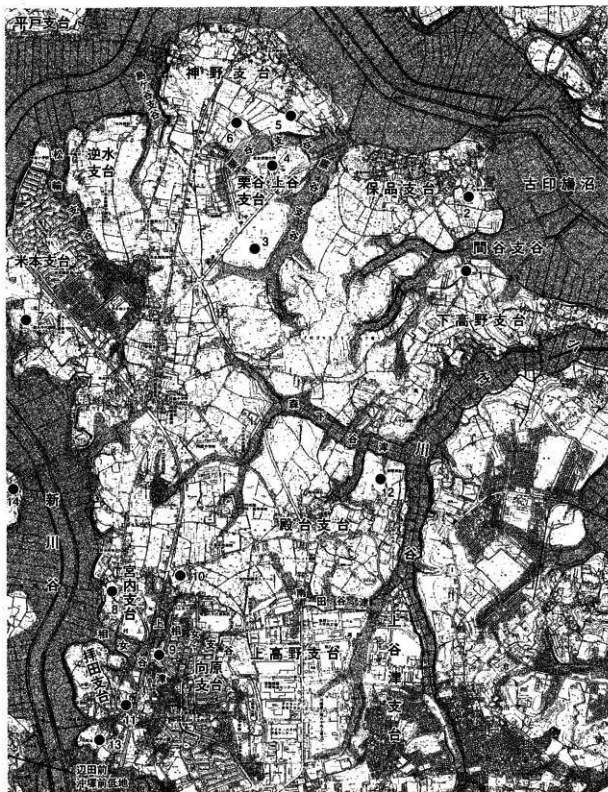
同年6月10日より機材を搬入する。時を同じくして調査補助員を投入し、遺構確認作業にかかる。そして、遺構を確認後、ただちに遺構調査を開始する。

この後、順次諸作業を行い、平成6年7月13日に現地調査を終了した。そして、同日中に発掘機材の撤収・搬出を行って、野外作業の全てが終了となった。

b地点は、平成9年12月4日より、バックホーによる表土除去を開始し、同日中に終了した。

同年12月4日に機材を搬入する。時を同じくして調査補助員を投入し、遺構確認作業にかかる。遺構を確認後、ただちに遺構調査を開始する。

この後、順次諸作業を行い、平成10年3月31日に現地調査を終了した。そして、同日中に発掘機材の撤収・搬出を行って、野外作業の全てが終了となった。



第1図 周辺の古墳時代前期の遺跡 (1 : 25,000)

- | | | |
|----------|----------|------------|
| 1 南谷遺跡 | 6 向境遺跡 | 11 殿内遺跡 |
| 2 おおびた遺跡 | 7 蛸池台遺跡 | 12 上高野白幡遺跡 |
| 3 上谷遺跡 | 8 村上宮内遺跡 | 13 浅間内遺跡 |
| 4 栗谷遺跡 | 9 村上向原遺跡 | 14 菅地ノ台遺跡 |
| 5 境堀遺跡 | 10 西山遺跡 | |

3. 周辺の地理的・歴史的環境

南谷遺跡は、巨視的に見るならば新川（新川谷）に西面し、印籠沼（古印籠湾・香取湾・古印籠沼）に北面する、標高約 22m～26m 前後、現水田面との比高差約 20m 前後の村上台に位置する。

村上台は、西端が新川谷まで、東端は小竹川（小竹川谷）、南端は辺田前・沖塚前低地から黒沢谷まで、勝田台と分かれる。やや微視的に見た場合、印籠沼と小竹川谷へ向かう形で開析谷が発達しており、幾つもの小舌状台地（支台）群が形成された。そして、小竹川谷から印籠沼に面した一帯には、「千葉段丘」が発達し、新川谷に面した「下総上位面」では比較的急崖になると好対照をなす。

この村上台（むらかみだいの）東北端の一支台である、下高野支台（しもこうやしだいの）「千葉段丘」上、標高約 15m を中心として、本遺跡は造られている。ちなみに、現水田面との比高差は、約 9m を測る。

下高野支台から、間谷支台（まやしこく）を挟んで北面する支台が保品支台である。両支台ともに「千葉段丘」が発達し、「下総下位面」が標高約 22m 前後であるから、その比高差は、平均で 7m 前後となる。

第 1 図は、村上台における古墳時代前期を中心とした遺跡分布である。以下、支台毎に見て行きたい。最北端は、著名な神野貝塚をのせる神野支台で、⑤境堀遺跡・⑥向境遺跡が所在する。

この支台から、栗谷支台を挟んだ南側に栗谷・上谷支台で、③上谷遺跡・④栗谷遺跡が所在している。先述の 2 遺跡と合わせ、かつては便宜的に「東部遺跡群」と呼ばれていた。しかし、宮澤久史氏により改めて「保品・神野遺跡群（宮澤 2007 他）」と名付けられたため、本書もこれに従うことにしたい。

さらに、蕨谷支台を挟んだ東側に広がるのが保品支台であって、印籠沼に面した「千葉段丘」上を引心として、②おおびた遺跡が所在している。

神野支台から、鳥ヶ谷支台を挟んだ西側が逆水支台であるが、ここでは今のところ発見されていない。ここから、松輪支台を挟んで西側に隣接するのが米本支台で、⑦蛸池台遺跡が所在する。

米本支台から、新川谷に沿って南下し、村上台の基部付近を見て行くと、上相女支台（かみそうめしこく）と相女谷津（そうめやつ）の開析により、持田支台・宮内支台・向原支台などが形成されている。

宮内支台には⑧村上宮内遺跡が、向原支台には⑨村上向原遺跡、上相女支台の谷底に南面しているのが⑩西山遺跡で、持田支台には⑪殿内遺跡が所在する。これら 4 遺跡は、上記の「保品・神野遺跡群」と同様に、約 500m の距離しか離れておらず、将来的に遺跡群として捉えてゆくべき可能性を秘めている。

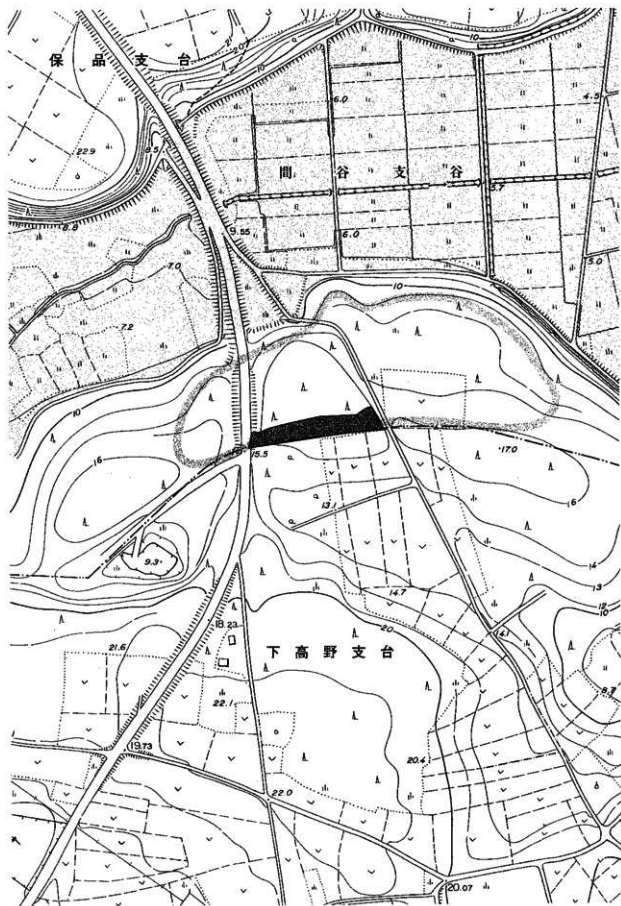
そして、⑪殿内遺跡から南方に約 300m の位置には、辺田前・沖塚前低地と新川谷に面して、⑫浅間内遺跡が所在しており、看過できない。ここでは古墳時代前期の集落跡だけでなく、前期古墳 1 基（浅間内古墳）が調査され、既に報告書が刊行されている（常松 2007）。

最後に、今度は目を転じて、東側の小竹川谷に面したあたりを見て行きたい。

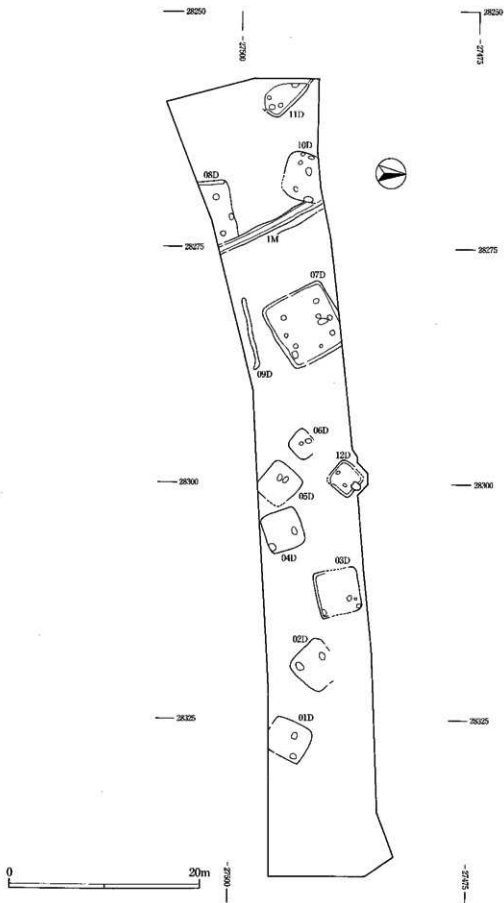
台地のほぼ中央から、小竹川谷に向かって比較的大きく幅広い開析谷が刻み込まれているのがわかる。この谷を地元呼び名に倣い、森下谷津と呼ぶ。この南側の大きな支台が殿台支台で、南端を画す開析谷が南田谷津である。殿台支台の北東部、小竹川谷と森下谷津に面して⑬上高野白幡遺跡が所在する。

参考文献

- 八千代市文化財総合調査団 1981 『八千代市文化財総合調査報告 Ⅰ』 八千代市教育委員会
八千代市教育委員会 1983 『八千代の遺跡 - 千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告』
宮澤久史 2007 「(7) 課題の抽出 栗谷遺跡の調査成果」 八千代栗谷遺跡研究会機関紙 『やちりけん』
創刊号 八千代栗谷遺跡研究会 24 - 28 頁
常松成人 2007 『千葉県八千代市 浅間内遺跡発掘調査報告書』 八千代市教育委員会
森 竜哉他 2009 『千葉県八千代市 殿内遺跡 b 地点』 八千代市教育委員会



第2図 遺跡範囲・調査範囲及び周辺の地形 (1:2,500)



第3図 遺構配置図

第2章 検出された遺構と遺物

1 旧石器時代

旧石器時代の遺構は、平成6年度のa地点及び平成9年度のb地点とも、検出されていない。

ここでは、調査区及び遺構覆土中から抽出された遺物を報告する。

(1) 遺構外出土遺物 (図版4)

図版4にナイフ形石器を掲載した。縦長剥片を素材とし、基部付近の側縁に調整刃を施す。風化が目立つ。石材は黒色緻密安山岩。長さ4.1cm、最大幅2.2cm、厚さ0.4cm、重量6.0g。他に礫片2点。

(2) 旧石器時代のまとめ

ナイフ形石器が単体で抽出された。隣接する先崎西原遺跡では、萱田遺跡群V期に相当するブロックが2箇所検出されている。本遺跡と無関係ではない可能性がある、とだけ指摘しておく。

2 縄文時代

縄文時代の遺構は、平成6年度のa地点及び平成9年度のb地点とも、検出されていない。

ここでは、調査区及び遺構覆土中から抽出された遺物を報告する。

(1) 遺構外出土遺物 (図版4・第4図)

図版4に掲載した石鉄片1点の他、縄文式土器26点が抽出できた。

その内訳は条痕文系2点、黒浜式1点、諸磯式1点、前期末葉1点、五領ヶ台式4点、阿玉台式2点、加曾利E式4点、堀之内式5点、加曾利B式4点、型式不明2点。なお、小片は図化しなかった。

1は諸磯a式土器。地文(直前段多条)を施文後、爪形文を描線として区画文を施し、区画内は磨滑。

2は前期末葉縄文系粗製土器の胴部片。施文は浅いが、縄文原体は直前段反燃りか。

3は五領ヶ台式土器。平行沈線を引き、小型三角形印刻を沿わず。八辺式Ⅲ期。この他Ⅳ期も出土。

4～5は阿玉台式土器。4はIb式の胴部(釜母混入型)。5はⅣ式の口縁部。大波状緑深鉢の波頂部の右半分が残存。波頂部を起点に、隆線による区画文(逆T字状区画)を構成する。隆線の上にキザミを施し、区画文の内側に2条1組の沈線を沿わせ、縦部の多条化沈線を充填する。胎土に雲母ごく微量。

6は加曾利E式土器。地文縄文2段RLを施文後、胴部磨消態垂文を施す。EⅡ式の胴部片である。

7は堀之内Ⅰ式土器。単沈線で粗い格子目文を描いた粗製土器の胴部片。

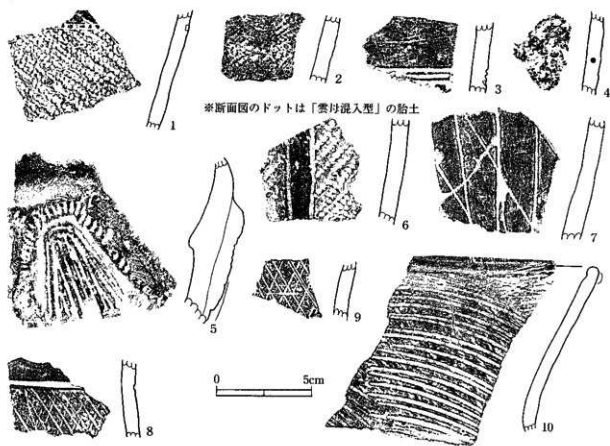
8～10は加曾利B式土器。8・9は、いわゆる「遠部第四類土器」の系譜を引くもので、胴中位～下半の破片。10は組線文系粗製土器で、組線が剥落している。以上はいずれも、加曾利B3式に比定されよう。

(2) 縄文時代のまとめ

ここでは、阿玉台式期について、少々触れてみることにする。

阿玉台Ⅳ式土器は、八千代市内で出土例が極めて少ない。村上台を瞥見すると、表面採集でも資料が得られる神野貝塚を除いて、下高野新山遺跡で1片出土した程度である。隣接する先崎西原遺跡では、阿玉台Ⅱ式～Ⅲ式土器が若干出土しており、Ⅳ式期の生活エリアが本遺跡に相当したのであろう。

上記に関連するが、阿玉台Ib式期では、古印旗湾に面した神野貝塚・埃堀遺跡・おおびた遺跡で、土器片錘に見られるように等質的な「内水域漁撈」が行われていた。それが阿玉台Ⅱ期以降、神野貝塚を除き、各遺跡で人間の活動の痕跡そのものが希薄化して行く。この事象を、神野貝塚(ムラ)に「漁業権」といった形で集約されていったことによる影響、と解釈してみたい。多分に推測の域を出ないが、その背景には人の離合集散なども想定すべきで、遺跡数及び出土遺物の減少は、今後とも注意を払う必要がある。



第4図 調査区出土縄文土器

3 弥生時代

弥生時代の遺構は、平成9年度のb地点で竪穴住居跡が1軒のみ検出された。

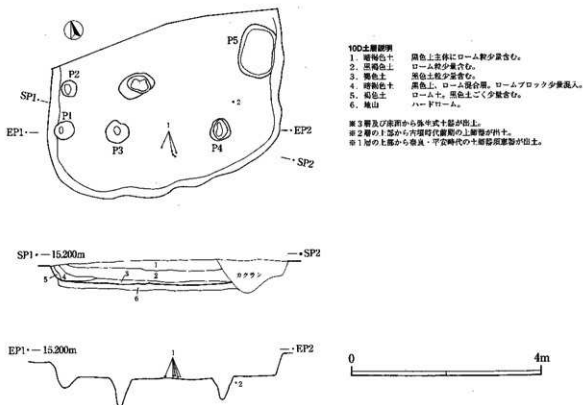
(1) 竪穴住居跡

10D (第5図～第6図)

位置 調査区西側で検出。東隣に07D、南隣に08D、西隣に11Dである。重複関係 01Mに破壊される。主軸方位 N-67°-W。平面形 やや胴の張る隅丸方形を呈する。規模 (3.68m) × 4.90m。遺構確認面からの深さ0.49m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 基本的にはハードロームまで掘り込んで、そのまま床としているが、部分的に黒色土を充填している。特に顕著な硬化範囲は見られなかった。周溝 廻らせていない。炉 床面中央よりも、西壁寄りに設ける。地床炉で、底面は焼けている。貯蔵穴 P5が該当する。平面形は隅丸長方形を呈する。ピット 4本検出。P3～P4が主柱穴で、廃屋に伴う上屋解体時に、柱を抜去している。P1・P2は壁際に掘られており、補助的な柱穴か。覆土 5層に分層できた。上層の1層は暗褐色土。下層の2層とした黒褐色土で大半が埋まっている。遺物の出土状態から、古墳前期ではいまだ窪地となっていたが、奈良・平安時代に完全埋没したものと解釈される。遺物出土状態 覆土の最上部では奈良・平安時代の須恵器、上層は古墳前期の上師器、下層及び床面(とその近く)からは弥生式土器が出土している。数量的には、圧倒的に古墳前期の上師器が多い。第6図1の壺形土器の頸部は、床面からは若干浮いていたが、比較的近接して破片が出土している。同図2の地文に附加条縄文を施した壺形土器の胴部片は、垂直分布が床面より下になるが、これは床面の凹凸の影響によるもので、本来的には床面直上ないし密着として捉えられる。建て替え 認められなかった。

出土遺物 (第6図)

出土総数は224点(弥生式土器24、縄文土器1、古墳前期土師器194、奈良・平安須恵器2、石3)。



第5図 10D実測図

1は細口長頸壺。「頸部横走文帯」として、頸部に無文部を挟み、櫛描文を帯状施文した横位の櫛描文帯を三段施文し、無文部はヘラミガキ調整。ここには焼成後、赤彩を施す。胎土は、細砂・長石・石英・スコリア・雲母細粒を含む。器内面に荒れが目立つ。

2～5は附加条縄文を地文として施文した壺形土器の胴部片で、同一個体。胎土は、細砂にやや粗めの長石・石英粒及び雲母細粒を含み、砂粒よりも目立つ観がある。内外面ともに黒褐色に焼かれている。2が最大径付近の破片、3は胴中位の破片、4・5は胴下半の破片である。いずれも器内面が荒れている。

6～20は壺形土器（広口壺を含む可能性あり）である。

6～8は頸部に櫛描文（矢羽根状・縦位）を施すもの。6は櫛描文と見るよりも、むしろ竹管の内側を用いた平行沈線とするべきで、矢羽根状文を描く。7も同様に平行沈線とすべきか。8はスパンを空けて、縦位に櫛描文を垂下するもので、直線状ではなく、やや蛇行気味に施文している。

9・10は附加条縄文を施文した胴部片。これらは、胎土に特徴があり、やや粗めの長石・石英粒及び雲母細粒を含み、上記の1～5、特に2～5と共通するものがある。ただ、前者よりはキメが細かく、色調は2点とも淡黄褐色に焼かれている点が異なる。

11は複合口縁で、口唇上から口縁部にかけて縄文を施文する。頸部は無文帯を形成し、頸部下端には結節縄文帯を施して、区画文の役目をなす。胎土は、細砂・長石・スコリア細粒を含む。

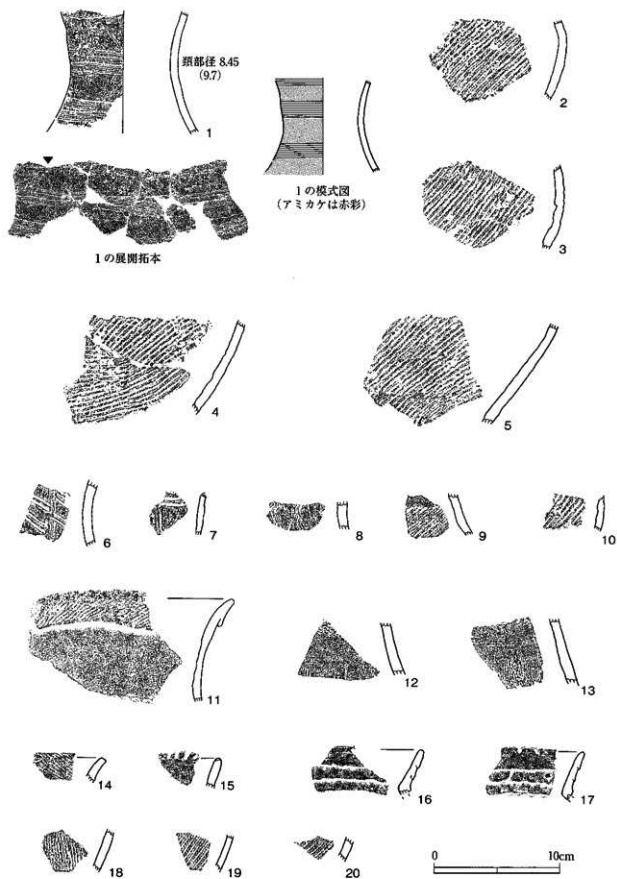
12・13は同一個体。頸部に無文帯を有し、上端区画は結節縄文による。胴部は附加条縄文を施す。

14は複合口縁か。口唇上から口縁にかけて附加条縄文を施文する。

15は単口縁で、口唇部にキザミを施す。内外面とも器面調整のみである。

16・17は輪積み帯を残す口辺部で、同一個体。輪積みの段は明瞭に残している。

18～20は附加条縄文を地文として施文した胴部片である。



第6図 10D出土遺物

4 古墳時代

平成6年度のa地点及び平成9年度のb地点を合わせ、竪穴住居跡11軒が検出された。それらは調査区全体に展開し、遺構の密度自体はかなり高いものがある。そのかわり、特に集中することはなく、各々の重複関係も、04Dと05Dの1例を除いて認められなかった。

今回は本調査に際して、グリッドを設定していないため、便宜的に空間区分を行って記載して行くことにしたい。01D～03Dを「調査区東側」、04D～06D(12Dも含む)が「調査区中央」、07D～11Dは「調査区西側」と仮に呼称する。

(1) 竪穴住居跡(第7図～第18図)

01D(第7図)

位置 調査区東側で検出。西隣に02D。重複関係 単独。主軸方位 N-63°-W。平面形 やや不整な隅丸方形を呈する。規模 4.21m×4.25m。遺構確認面からの深さ0.25m。壁 垂直気味に立ち上がる。ソフトローム下部～ハードローム上部まで掘り込み、床とする。炉の周囲の西側から北側にかけて硬化している。周溝 廻らせていない。炉 床面中央よりも西側に位置する。地床炉で、底面が特に焼けている箇所がある。貯蔵穴 P1が該当する。北東コーナー付近に設けている。平面形はやや不整な楕円形を呈し、底面は概ね平坦。ピット 検出されず。覆土 4層に分層できた。上層(1層・2層)は暗褐色土系で、しまっている。4層はいわゆる「壁土」ないし、「板壁」の裏込め土。1～4層とも自然堆積で、従って本跡は自然埋没と思われる。遺物出土状態 床面直上出土遺物としては、北壁際の塔、炉の南東付近の器台がある。建て替え 認められなかった。備考 西壁の中央壁際に、遺構内堆積貝層が見られた。また、北壁・東壁及び西壁際に焼土が分布する。区域外のため、一部未調査。

出土遺物(第7図)

出土総数は194点(古墳前期土師器179、石1、粘土1、奈良・平安須恵器13)。

1～9は土師器。1は壺の胴中位～底部の $\frac{1}{2}$ 周が残存。器面調整は、㊸ハケナデ後、胴下半はヘラケズリ。この後ヘラミガキ。㊹ハケナデ後、ごく部分的にヘラナデを施す。

2・3は甕。2は口縁～胴上部の一部。㊸ハケナデ後、口縁はナデ。㊹ハケナデ後、口縁はナデ、胴上部はヘラナデ。外面にススないシオコグの付着あり。3は口縁～胴下半。細砂、長石、スコリア細粒含む緻密な胎土で、器壁は極めて薄手。㊸ハケナデ後、口縁部ナデ、胴中位以下はヘラケズリ後ヘラナデ。㊹ハケナデ後、口縁部はナデ(程度は弱い)。外面にススが付着している。

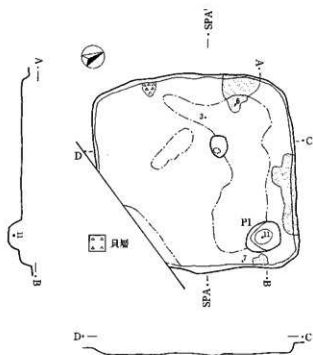
4～6は器台。4はほぼ完存品(裾部の一部を欠く)。㊸ハケナデ後、ていねいなヘラミガキ。㊹ハケナデ後、器受部はヘラミガキ。焼成後、内外面に赤彩を施す。5は器受部の一部。内外面ともハケナデ後、ヘラミガキ。焼成後赤彩を施す。6は脚部～裾部の $\frac{1}{2}$ 周が残存。細砂、長石、スコリア細粒含む緻密な胎土。㊸ハケナデ後、ヘラミガキ。この後赤彩。㊹ハケナデ後、ナデ。

7・8は小形丸底壺。7は口辺の $\frac{1}{2}$ 周を欠く。㊸ヘラケズリ後、ヘラミガキ。㊹ヘラケズリ後、口辺はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。8は口辺部の $\frac{1}{2}$ 周が残存。細砂、長石、スコリア細粒含む緻密な胎土。器面調整は、内外面ともヘラケズリ後、ていねいなヘラミガキを施す。

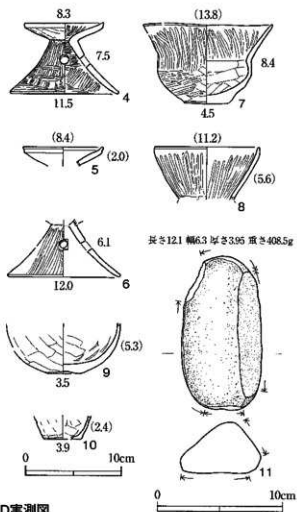
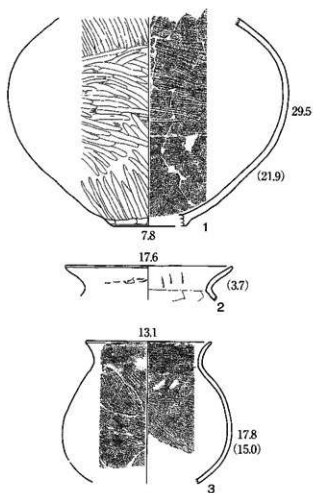
9は小形壺の胴部片。器面調整は、内外面ともヘラケズリ後、ヘラナデ。器外面にやや黒斑が目立つ。

10はミニチュア土器で、甕形ないしは壺形か。胴下半部以下の残存のため不明。細砂、長石、赤色スコリア細粒含む胎土。器面調整は、㊸ヘラケズリ後、ナデ。㊹ナデ。

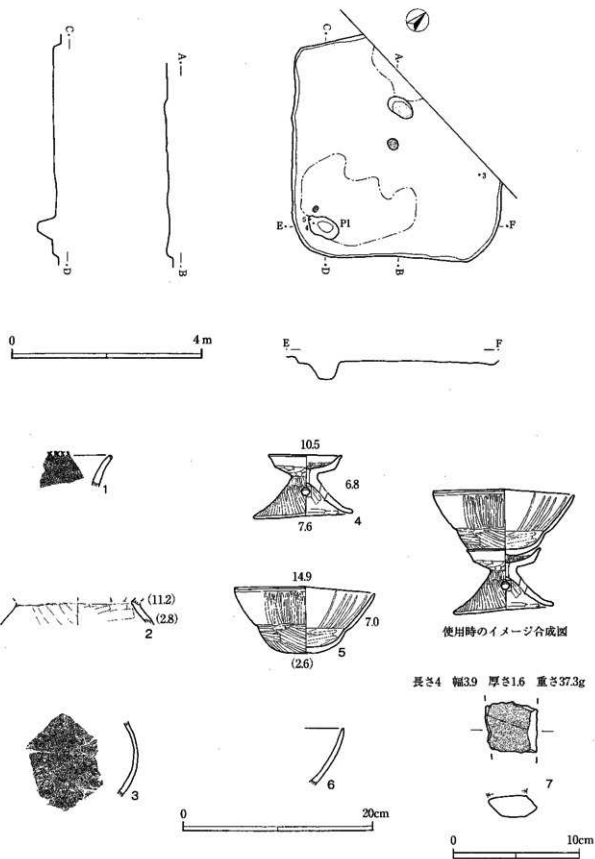
11は石製品で、砥石。楕円形の自然礫を用い、稜と基部を敲打により整形し、その他を使用面とする。その他、12動物遺存体として、ハマグリが19個体以上、総重量156g出土した。他ではタニシ科が1個体、総重量1.2gが出土。これらはいずれも破損しており、合わせ貝の類は見られなかった。



- O1D土層説明**
1. 黒褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 黒褐色土
 4. 茶褐色土
- ローム状混入。
 1層部は、茶色土と混入してしまっている。
 ローム粒少量混入・若干さらさらしている。
 ローム状混入。



第7図 O1D実測図



第8図 02D実測図

02D (第8図)

位置 調査区東側に検出。東隣に01D、西隣に03D。重複関係 単独。主軸方位 N-49°-W。平面形 隅丸方形を呈する。規模 (4.72m) × 4.44m。遺構確認面からの深さ0.17m。壁 残存が比較的良好な部分では、ほぼ垂直に立ち上がる。床 ソフトロームまで掘りこみ、床とする。全体的に硬化しているが、特に南西コーナーから貯蔵穴の周辺が顕著である。逆に、炉の東側は他に比べてやや硬化が顕著でない。周溝 廻らせていない。炉 ほぼ中軸上に、大小2基。ともに地床炉で、底面は良く焼けている。貯蔵穴 南西コーナーのP1が該当する。平面形は楕円形を呈し、底面は比較的平坦である。ピット 検出されず。覆土 暗褐色土と茶褐色土の2層に分層できた。本跡は自然埋没である。遺物出土状態 床面直上出土遺物としては、南東コーナー寄りの器台・小形丸底壺があり、両者は比較的近接した位置関係にある。建て替え 認められなかった。備考 一部未調査。

出土遺物 (第8図)

出土総数は251点 (古墳前期土師器246, 砥石1, 石4)。

1～6は土師器。1～3は甕。1は口縁片。㊸ハケナデで、口唇上にキザミ。㊹ハケナデ後、ヘラミガキ。2は胴中位～下半。㊺胴中位はハケナデ、下半はハケナデ後ナデつけ。㊻ヘラナデ。外面の胴下半は亦変化している。3は甕肩部片。㊼ヘラケズリ後、ヘラナデ。㊽ハケナデ後、ヘラナデ。

4は器台で、完存品。全体として器壁が厚めで、器受部や裾部の端部の作りがやや雑であるため、中軸線を見た場合、左右対称にはならない。細砂、長石、スコリア細粒含む緻密な胎土。㊾器受部は口辺ナデ、下端はヘラケズリ後ヘラナデ。裾部はヘラミガキ。㊿器受部は口辺ナデ、内面ヘラミガキ。裾部はヘラケズリ後ヘラナデ。脚部の透孔は三孔式である。赤彩は認められなかった。

5は小形丸底壺。口辺の $\frac{1}{2}$ を欠く。細砂、長石、赤色スコリア細粒含む胎土。㊿ヘラケズリ後、ヘラミガキ。㊽ヘラケズリ後、ヘラミガキ。6は小形丸底壺の口辺部。胎土・器面調整は、ほぼ2と同様。

03D (第9図～第10図)

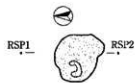
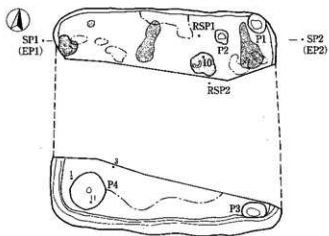
位置 調査区東側に検出。東隣に02D、西隣に04D。重複関係 単独。主軸方位 N-13°-W。平面形 隅丸長形を呈すると思われる。規模 (4.80m) × 4.70m。遺構確認面からの深さ0.70m。壁 垂直に立ち上がる。床 ソフトロームを10cm程掘り込み、床とする。中央に向かって部分的に硬化面がある。周溝 南壁下及び西壁下の一部に廻らせている。炉 四辺からの対角線上の、北東コーナー寄り。地床炉で、底面は焼けている。貯蔵穴 位置的には、P4が該当する可能性がある。平面形は略円形を呈し、ごく浅い。覆土はロームブロックを含む褐色土。ピット 3本検出。いずれもコーナー付近に掘られており、補助的な柱穴か。覆土 7層に分層できた。暗褐色土主体で、埋め戻し土である。遺物出土状態 床面直上出土遺物としては、P3付近の小形壺がある。これは、床面上に「倒位の状態で遺棄」されていた。建て替え 認められなかった。備考 本跡は諸般の事情で、中央部の $\frac{1}{2}$ が調査できなかった。

出土遺物 (第9図～第10図)

出土総数は235点 (古墳前期土師器208, 石21, 縄文土器6, 不明鉄製品1)。

1～12は土師器。1・2は甕。1は口縁部～肩部の残存。複合口縁を呈する。㊸ハケナデ後、口縁部はヘラナデ、頸部はヘラミガキ。㊹ハケナデ後、ヘラミガキ。2は胴下半～底部の残存。底部は上げ底状となる。㊼ヘラケズリ後、ヘラナデ。㊽ヘラナデ。器内面の剥落が目立つ。外面に赤彩の痕跡。

3～5は小形壺。3はほぼ完存品で、口縁の一部を欠く。㊿口縁部ナデ、胴部はヘラケズリ後、ミガキに近いヘラナデ。㊽ヘラナデを施す。4は口辺部片。器面調整は、内外面ともハケナデ後、ていねいなヘラミガキを施す。5は口縁部～胴上部。器面調整は、㊸ハケナデ後、ヘラミガキ。㊹ヘラナデ。外面に、焼成後に赤彩を施している。



RSP1 — — — — — RSP2

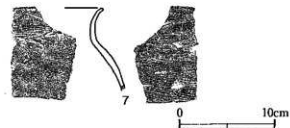
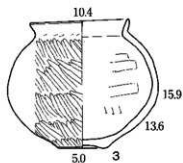
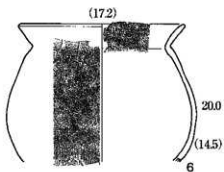
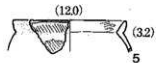
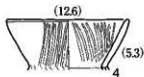
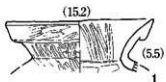


03D土層説明

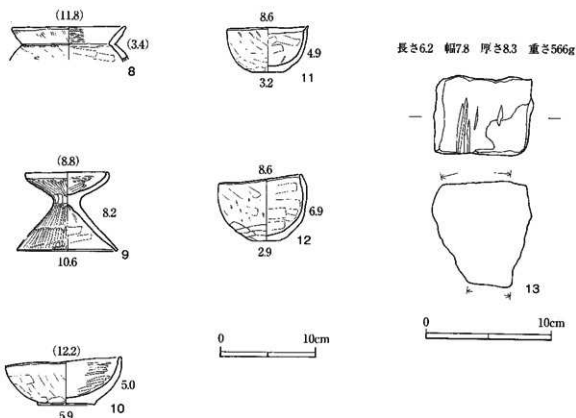
- | | |
|----------|------------------------|
| 1. 暗褐色土 | 茶色土、ローム混合層。 |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒主に暗褐色土混入。 |
| 3. 暗赤褐色土 | ローム粒十粒、暗褐色土粒、焼上ブロック混入。 |
| 4. 暗赤褐色土 | 3層傾斜、焼上粒の混入が少ない。 |
| 5. 暗褐色土 | ロームブロック、暗褐色土混層。 |
| 6. 暗褐色土 | 焼上粒ごく少量混入。 |

03D土層説明

- | | |
|---------|-------------------|
| 1. 暗褐色土 | 焼上粒混入。焼土ブロック混入。 |
| 2. 暗褐色土 | 焼土ブロック主に暗褐色土少量混入。 |



第9図 03D実測図



第10図 03D出土遺物(2)

6・7は甕。6は口縁～胴下半の $\frac{2}{3}$ が残存。㊸ハケナデ後、口縁部はナデ。㊹ハケナデ後、口縁部はヘラナデ。胴部はヘラナデを施す。外面にススが附着。7は口縁部～胴上部片。㊺ハケナデ後、口縁部のみ若干ヨコナデ。㊻ハケナデ後は無調整。外面にススの附着が顕著である。

8は小形甕の口縁部～胴上部。器面調整は、㊼ハケナデ後、口縁部はヨコナデ、胴部はナデ。㊽口縁部ハケナデ、胴部はヘラナデを施す。

9は器台。裾部の一部を欠く。㊾器受部の口縁はナデ、体部と脚部はヘラミガキ。㊿器受部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。外面に赤彩の痕跡がある。

10は埴で、口縁～体部の一部を欠く。㊿ヘラケズリ後、ヘラナデ。㊽ヘラケズリ後、ヘラミガキ。

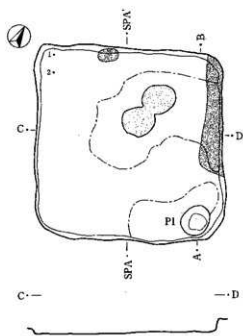
11・12は小形鉢。11は体部の一部を欠くのみ。㊿口縁はヨコナデ、体部はナデ。㊽ヘラケズリ後、ヘラナデ。12は口縁の一部を欠くのみ。㊿口縁はヨコナデ、体部はナデ後、ヘラケズリ。㊽ヘラケズリ後、ヘラナデ。2点とも砂、長石、石英、スコリア粒子を含む胎土で、近似している。

13は石製品で、砥石。やや不整な六面体に整形され、使用面の中に幾条かの溝状を呈する使用痕(面)が有る。表面全体に火を受けた形跡があり、赤変色している。石材は砂岩を用いている。

この他、不明鉄製品が1点。形状は扁平かつ板状である。錆が日立つ。あるいは後世の所産か。

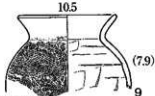
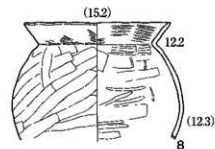
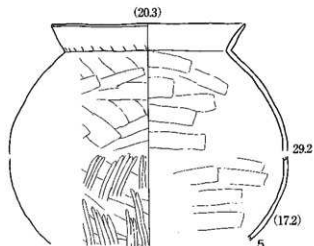
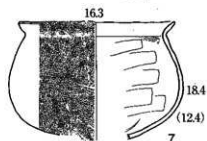
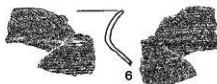
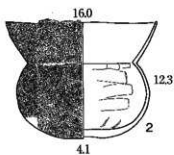
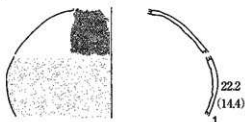
04D(第11図)

位置 調査区中央で検出。東隣に03D、西に05D。重複関係 05Dを破壊する。主軸方位 N-20°-W。平面形 やや不整な隅丸方形を呈する。規模 4.10m×4.02m、遺構確認面からの深さ0.23m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 ハードルームを3~5cm掘り込んでから、貼床とする。炉の周囲及び貯蔵穴の周囲が硬化している。周溝 廻らせていない。炉 中央よりも北壁に寄っており、中軸線よりも東壁寄り設ける。2基とも地床炉で、底面はよく焼けている。両者の新旧に関しては明らかにできなかつ



04D土層説明

1. 黒褐色土 ローム粒少量含む。しまっている。
2. 暗褐色土 1層状に、ローム粒2-3mm程度のものに含む。しまっている。
3. 暗褐色土 黒土粒少量含む。さらさらしている。
4. 暗褐色土 黒土粒中体的に含む。しまっている。
5. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を含む。さらさらしている。
6. 赤褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混交。さらさらしている。
7. 赤褐色土 腐植土。ローム粒の割合が多い。さらさらしている。



外面にスス付着

第11図 04D実測図

た。貯蔵穴 南西コーナーのP1が該当する。平面形は略円形を呈し、底面は比較的平坦である。ピット 検出されず。覆土 7層に分層できた。最上層は黒褐色土であるが、全体としての主体は暗褐色土。本跡は自然埋没である。遺物出土状態 コーナー付近に、まとまった量の土器廃棄が認められた。これは、土器片の状態での廃棄である。床面直上出土遺物として目立った物はない。建て替え 認められなかった。備考 北壁中央及び東壁一帯に焼土(厚さは5~10cm)が分布する。

出土遺物(第11図)

出土総数は721点(古墳前期土師器702,石10,縄文土器3,奈良・平安土師器2,須恵器4)。

1~10は土師器。1は壺で、肩部~胴中位の破片。肩部には1段Lの「端末結節」を施し、胴部は焼成後赤彩を施す。本例の諸属性に、南関東系の弥生式土器の遺制が顕著に認められる。

2は大埴。口縁部~胴部の $\frac{1}{2}$ 周を欠く。㊶ハケナダ後、胴下半はヘラケズリ。㊷ヘラナダ。

3は小形丸底壺で、口縁部片。㊸ヘラミガキ。㊹ナダ後、ヘラミガキ。内外面に焼成後赤彩を施す。

4は壺と思われる胴部片。㊺ヘラケズリ後、ナダ。㊻ヘラケズリ後、ヘラナダ。外面にススが付着。

5~8は甕。5は口縁部~胴下半。㊼ヘラケズリ後、ナダ。㊽ヘラケズリ後、ヘラナダ。6は口縁~胴上部片。㊾ハケナダ。㊿ハケナダ後、胴部はヘラナダ。7は口縁部~底部付近まで残存。㊿ハケナダ後、口縁部はヨコナダ、胴下半ヘラケズリ。㊿ハケナダ後、胴部はヘラナダ。8は口縁部~胴部の $\frac{1}{2}$ 周が残存。㊿ハケナダ後、口縁はヨコナダ、胴部はナダ。㊿ハケナダ後、ヘラナダ。

9は小形甕。口縁部~胴上部の $\frac{1}{2}$ 周が残存。砂、長石、石英、スコリア粒、小礫含む胎土。㊿ハケナダ後、口縁部はナダ。㊿ハケナダ後、口縁部はナダ、胴部はヘラナダ。

10は器台。器受部~脚部の付け根。細砂、長石、スコリア粒含み、緻密な胎土。㊿器受部はヘラナダ、脚部はヘラミガキ。㊿器受部はヘラミガキ。内外面とも焼成後赤彩を施す。

05D(第12図)

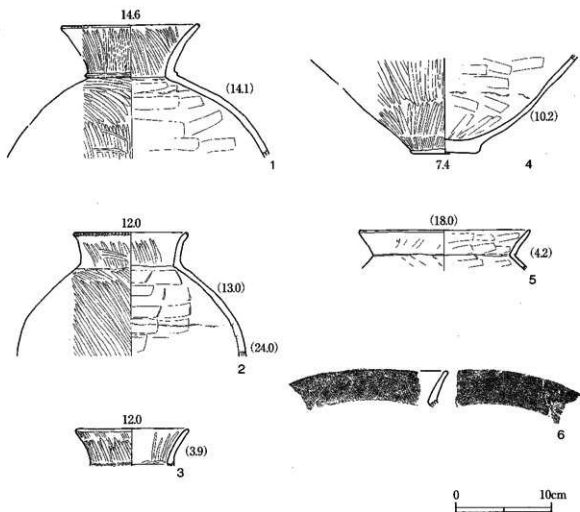
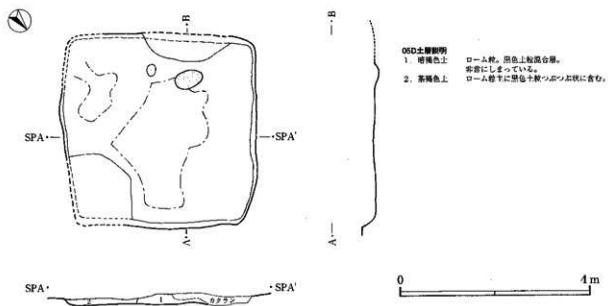
位置 調査区中央で検出。東に04D、西隣に06D、北隣には12D。重複関係 04Dによる破壊を受ける。主軸方位 N-51°-W。平面形 隅丸方形を呈する。規模 4.11m×4.15m。遺構確認面からの深さ0.16m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 ハードルームまで掘り込んでから、貼床とする。炉の南側から南壁にかけて硬化面あり。周溝 廻らせていない。炉 北壁寄り、中軸線から東側に寄った位置に設ける。地床炉で、底面はよく焼けている。貯蔵穴 不明(南西コーナーが未調査のため)。ピット 検出されず。覆土 2層に分層できた。どちらも埋め戻し土で、1層は非常にしまっている。遺物出土状態 床面直上出土遺物としては、甕がある。建て替え 認められなかった。備考 北側一帯で人為的な埋め戻しを確認した。調査区域外にかかるため、一部未調査。

出土遺物(第12図)

出土総数は212点(古墳前期土師器210,石2)。

1~6は土師器。1~3は壺。1は口縁部~胴上部が残存する。細砂、長石、スコリア粒子含み、やや緻密な胎土。㊿ヘラミガキ。㊿ヘラナダ。内外面とも最終調整により、最初の調整痕は不明。2は口縁部~胴上部が残存する。内外面とも黒褐色に焼き上げられている。㊿ていねいなヘラミガキを施しており、光沢がある。口縁端部にキザミを施す。㊿ヘラナダ。3は口縁~頸部が残存する。㊿ハケナダ後、ヘラミガキを施す。部分的にハケナダが残っている。頸部の付け根に、円形竹管などの工具による刺突列を施文する。㊿ヘラミガキ。器外面に焼成後赤彩を施している。

4~6は甕。4は胴下半~底部が残存。砂、長石、赤色スコリア粒を含む胎土。㊿ハケナダ後、ミガキに近いヘラナダ。5は4と胎土・焼成・器面調整が近似しており、同一個体になるか。6は口縁部の破片。㊿ハケナダ。㊿ハケナダ後、ヘラナダを施す。



第12図 05D実測図

06D (第13図)

位置 調査区中央で検出。東隣に05D、西隣に07D。重複関係 単独。主軸方位 N-43°-W。

平面形 かなり扇の張る隅丸長方形を呈する。規模 2.68m × 3.03m。遺構確認面からの深さ 0.16m。壁 垂直気味に立ち上がる。床 ソフトローム上面まで掘りこんでから、貼床とする。中央から北東側にかけて硬化している。周溝 廻らせていない。炉 床面のほぼ中央に2箇所、床が焼けている部分があるが、炉として使用したものかは不明である。貯蔵穴 検出されず。ピット 床面の中央やや北東寄りに1本検出。平面形は楕円形を呈し、底面に向かって先すばまり状に掘られている。その機能が主柱穴か否かは不明である。覆土 黒色土(茶褐色土・ローム粒含む)の単一土層。遺物出土状態 高坏脚部・壺口縁部が、床面よりやや浮いた高さで出土した。建て替え 認められなかった。

出土遺物 (第13図)

出土総数は177点(古墳前期土師器173,石1,縄文土器3,奈良・平安土師器1)。

1~11は土師器。1~6は壺。1はいわゆる有段口縁壺である。口縁部~胴部が残存。㊸ハケナデ後、ヘラミガキ。㊹ハケナデ後、ミガキに近いヘラナデ。2は胴上部~胴中位が残存。㊸ハケナデ後、ヘラミガキ。㊹ハケナデ後、ヘラナデ。3は胴下半~底部が残存。㊸ヘラケズリ後、ヘラナデか。㊹ミガキに近いヘラナデ。本例は全体的に器面剥落が目立つ。4・5は大形壺の胴部片で、同一個体。砂、長石、赤色スコリア、黒色粒を含む胎土である。㊸ヘラケズリ後、ヘラミガキ。㊹ヘラナデ(器内面は荒れている)。南関東系弥生式土器の系譜を引くものである。6は胴中位の残存。細砂、長石、スコリア、雲母細粒を含む緻密な胎土で、内外面ともに淡褐色呈する。㊸いねいなヘラミガキ(最終調整。この前の工程は不明)。㊹ヘラナデ(器内面は荒れている)。

7・8は甕。7は口縁部~胴上部が残存。㊸ハケナデ後、口縁部はヨコナデ。㊹ハケナデ後、胴部はヘラナデ。8は口縁部~胴上部片。㊸ハケナデ後、口縁部は軽くヨコナデ。㊹ハケナデ後、ヘラナデ。

9は甕で、多孔式の底部片。砂、長石、石英、雲母粗粒を含む胎土。㊸ヘラケズリ。㊹ヘラナデ。孔は焼成前穿孔である。本例は、底部に焼成前穿孔を多数穿つもので、同じ道具を用いたと見えて、孔径は一定している。あるいは後代の所産か。

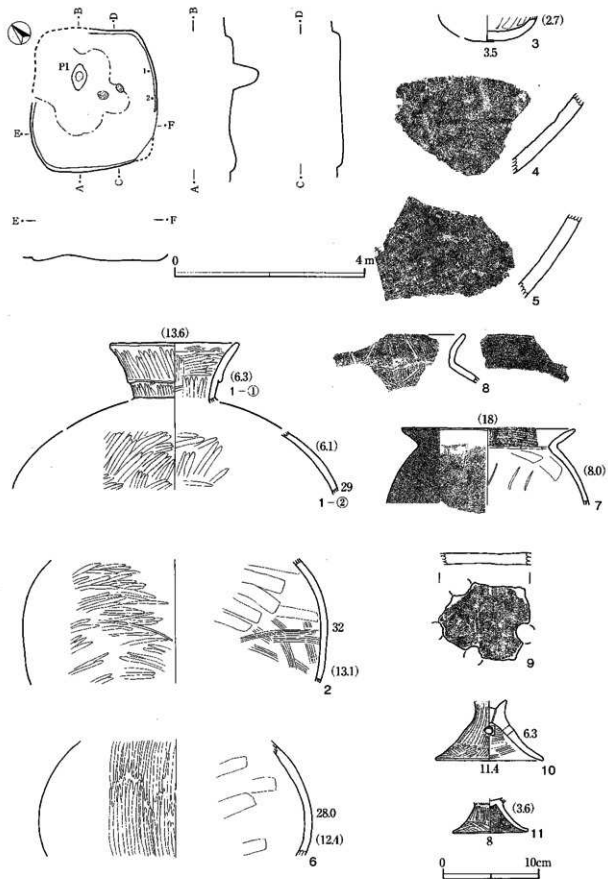
10は高坏。脚部が残存する。㊸ハケナデ後、ヘラミガキ。㊹ハケナデ。外面に赤彩を施す。

11は小形高坏。脚部が残存する。㊸ヘラケズリ後、ヘラミガキ。㊹ヘラナデを施す。内面にススなしいタール状の付着物が認められる。

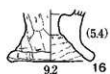
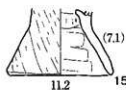
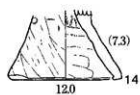
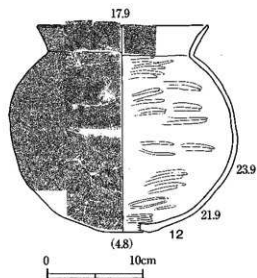
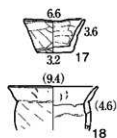
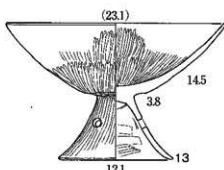
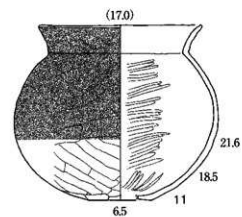
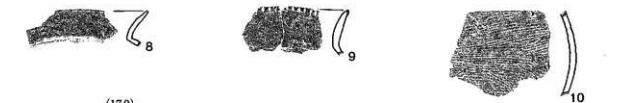
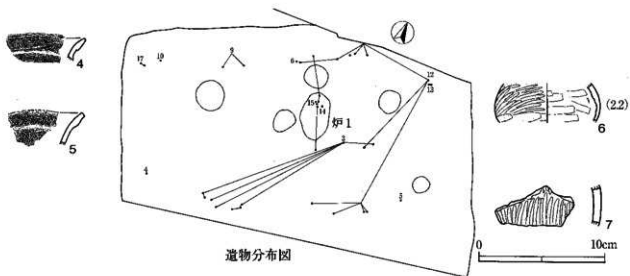
07D (第14図~第15図)

位置 調査区西側で検出。東隣に06D、南隣に09D。重複関係 単独。主軸方位 N-30°-W。

平面形 方形を呈する。規模 7.00m × 7.38m。遺構確認面からの深さ 0.59m。壁 垂直に立ち上がる。床 ハードロームを7~15cm程掘り込んでから、黒色土・ロームブロックで埋めて貼床とする。炉の周囲と北側の主柱穴の周辺が硬化しているが、他は軟弱である。周溝 調査部分では全周する。炉 北側に寄り、中軸線よりも東壁寄りに大小2基設ける。ともに地床炉で、底面は良く焼けている。2基の間には新旧関係は認められなかった。貯蔵穴 南東コーナーのP8が該当する。平面形は方形を呈する。ピット P1~P4が主柱穴である。南壁際のP5と、東壁際のP6の2本は出入口。その他では補助的な柱穴として、炉の北側のP7がある。覆土 5層に分層できた。黒褐色土主体で、壁際に暗褐色土の三角堆積が見られる。遺物出土状態 遺物の多くは、2層中に廃棄されている。そのため、遺物出土レベルが壁際では高く、床面中央に向かい低くなる。建て替え 認められなかった。第14・15の異形器台は、炉1の中及び周囲から出土している。備考 貯蔵穴の東脇の床面上に粘土塊が検出された。用途などに関しては不明である。P5・P6の存在から、出入口を90度振りかえていることが判明した。



第13图 06D实测图



長さ2.95 幅3.05 厚2.65 重さ20.7g



長さ3.6 幅3.0 厚2.29 重さ5.4g



第15図 07D出土遺物(2)

出土遺物（第14図～第15図）

出土総数は959点（古墳前期土師器872, 石62, 縄文土器7, 弥生土器11, 奈良・平安土師器6, 須恵器1）。

1～16は土師器。1～5は壺。1は口縁部～肩部が残存する。頸部の付け根に、断面略三角形の隆帯を貼付している。細砂、長石、赤色スコリア細粒を含む胎土。㊸ハケナデ後、ヘラミガキ。㊹ハケナデ後、口縁部はヘラミガキ、肩部ヘラナデ。外面に焼成後、赤彩を施している。

2は胴部の残存。細砂、長石、赤色スコリア細粒を含む胎土。㊸ハケナデ後、ヘラナデ。㊹ヘラナデ。

3は胴下半～底部が残存する。砂、長石、石英、赤色スコリア粒を含む胎土。㊸ヘラケズリ後、ヘラミガキ。㊹ヘラナデ。器内面は荒れている。

4は口縁片で、複合口縁。細砂、長石細粒、赤色スコリア粒を含む胎土。㊸ハケナデ。口唇上に原体圧痕。㊹ハケナデ後、ミガキに近いヘラナデ。5も口縁片で、複合口縁。4とほぼ同内容の胎土である。㊸ハケナデ。口唇上に原体圧痕。㊹ハケナデ後、ミガキに近いヘラナデを施している。これら2点は、弥生式土器である可能性がある。

6は小形丸底壺で、胴中位の破片。細砂、長石、スコリア細粒含む胎土。㊸ヘラケズリ後、ヘラミガキ。㊹ヘラナデ。外面に赤彩を施す。

7は人増か。胴部片である。細砂含む緻密な胎土。㊸ヘラミガキ。㊹器面が荒れており、調整は不明。外面に赤彩を施す。

8～12は壺。8は口縁部～肩部が残存。細砂、長石、スコリア細粒を含む胎土。㊸ハケナデ。㊹ハケナデ後、ヘラナデ。9は口縁片。細砂、長石、赤色スコリア細粒を含む胎土。㊸ハケナデ。㊹ハケナデ後、ヘラナデ。口唇部にキザミを施す。10は胴部片。砂、長石、石英、スコリア、雲母粒を含む胎土。㊸ハケナデ。㊹ハケナデ後、ヘラナデ。11は口縁部～底部までが残存する。細砂、長石、赤色スコリア細粒を含む胎土。㊸ハケナデ後、口縁部はヨコナデ、胴上部ナデ、胴下半ヘラナデ。㊹ヘラナデ後、部分的にヘラミガキ。12は口縁～底部までが残存する。細砂、長石、スコリア細粒を含む胎土。㊸ハケナデ後、口縁部はナデ、胴下半はヘラナデ。㊹ヘラナデ後、部分的にヘラミガキ。

13は高坏。有稜高坏で、部～裾部までが残存する。細砂、長石、スコリア細粒含む、緻密な胎土。㊸坏部～裾部はヘラケズリ後、タテ方向を主とする、ていねいなヘラミガキ。㊹坏部はていねいなヘラミガキ、脚部はヘラケズリ後、ヘラナデ調整を施す。

14～16は異形器台。14は脚部が残存する。砂、長石、赤色スコリア粒を含む胎土。㊸ナデ。㊹ヘラナデと指ナデを施す。

15も脚部が残存する。砂、長石、赤色スコリア粒を含む胎土。㊸ナデ。㊹ヘラナデと指ナデを施す。

16は器受部の一部と脚部が残存する。砂、長石、赤色スコリア粒含む胎土。㊸ナデ。㊹ナデを主に、ヘラナデが一部入る。

17～19はミニチュア土器。17は鉢で、口縁部～底部の一部を欠く。細砂、長石、スコリア細粒を含む胎土。㊸ヘラケズリ後、ナデ。㊹ヘラナデを施す。

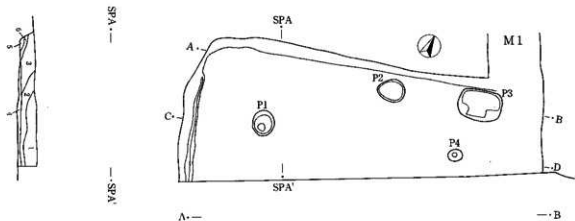
18は壺で、口縁部～胴部が残存する。細砂、長石、赤色スコリア細粒含む胎土。㊸口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリ後、ナデ。㊹ヘラナデを施す。

19は坏か。完存品である。胎土は17と近似している。粘土塊を指頭によって整形したものである。内外面ともナデ調整を施している。

20は土玉。孔辺の調整は、ヘラケズリを花卉状に施す。表面は基本的に無調整である。

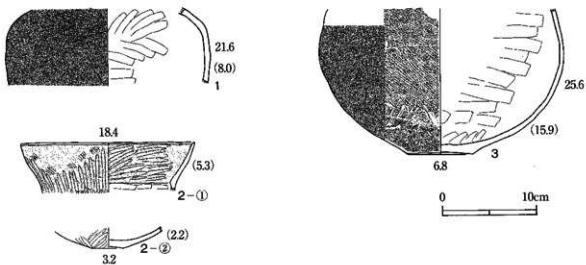
21は石製品で、砥石。自然面を何ら荒加工せず使用面としている。軽石製。

その他、時期不明の鉄製品が1点出土しているが、近・現代の可能性もあり、図化しなかった。



08D土層説明

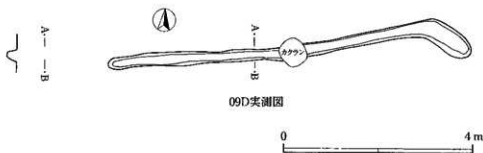
1. 黒色土 暗黒色で粒子、細かい。しまっている。
2. 暗褐色土 黒色土・暗褐色土混合2mm大ローム粒を部分的に含む。しまっている。2部採取。暗褐色土との割合が若干多い。ロームブロックを含む。
3. 暗褐色土 暗褐色土。ローム粒少量を含む。ローム粒少数含む。
4. 明褐色土 暗褐色土。ローム粒少数含む。若干はそばそ。
5. 黒褐色土 暗褐色土。ローム粒少量を含む。
6. 茶褐色土 暗褐色土。ローム粒少量を含む。



第16図 08D実測図



08D出土遺物 (2)



09D実測図

第17図 08D出土遺物 (2)・09D実測図

08D (第16図～第17図)

位置 調査区西側で検出。東隣に09D、北隣には10D。重複関係 01Mに破壊される。主軸方位 N-14°-W。平面形 方形を基調とする(未完掘)。規模 3.27m×6.58m。遺構確認面からの深さ0.38m。
壁 比較的ゆるやかに立ち上がる。床 ハードローンを若干掘り込んで床とするが、部分的に貼床も見られる。特に顕著な硬化範囲は認められず、全体に軟弱である。周溝 西壁では掘られている。炉 調査部分からは検出されず。貯蔵穴 P3が該当する。北東コーナーに設けられ、平面形は隅丸長方形を呈し、底面は概ね平坦。ピット 3本検出。P1・P4が主柱穴。P2の用途・機能は不明。覆土 6層に分層できた。上層は黒褐色土で、全体的には暗褐色土が主体となる。遺物出土状態 床面直上出土遺物は少なく、かつ特に目立った文物はない。大半は覆土中からの出土である。建て替え 認められなかった。備考 本跡の南半分は調査区域外のため、未調査である。

出土遺物 (第16図～第17図)

出土総数は139点(古墳前期土師器134、石2、弥生土器3)。

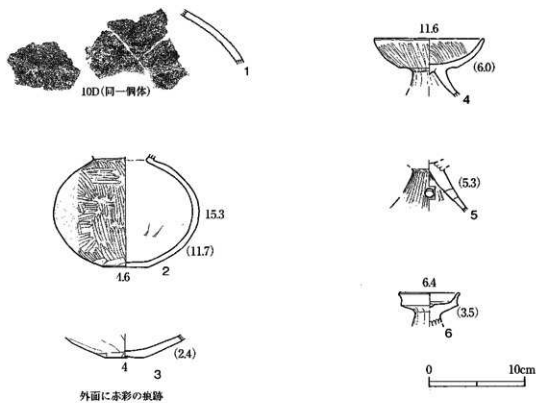
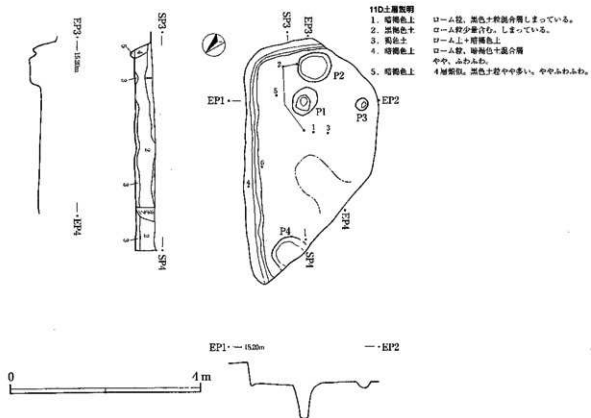
1～6は土師器。1は壺で、肩部～胴中位の破片。㊸肩部ヘラミガキ、胴部はヘラナデ。㊹ヘラナデ。器外面にススが付着する。

2は小形丸底壺。口縁部～胴部、胴部～底部が残存(接合せず)。㊸ハケナデ後、ヘラミガキ。㊹ヘラミガキ。器内面は荒れている。

3は壺の胴中位～底部。㊸ハケナデ後、底部付近のみヘラケズリ。㊹ヘラケズリ後、ヘラナデ。

4は高坏の脚部片。㊸ヘラケズリ後、ヘラミガキ。㊹ヘラケズリ後、ヘラナデ。外面は赤彩を施す。透孔は三つ確認できた。

5・6は器台。5は器受部～脚部の一部が残存する。㊸肩部ヘラミガキ、胴部はヘラナデ。㊹ヘラナデ。



第18図 11D実測図

6は器台で、裾部片。㊸ヘラミガキ。㊹ヘラナデ。外面に赤彩を施す。

09D (第17図)

位置 調査区西側で検出。北隣に7D、西隣には08D。重複関係 不明。主軸方位 (W-14°-S)。平面形 方形を基調とする(一部分のみ)。規模 (7.57m)×最大幅0.35m。遺構確認面からの深さ0.08m。壁 ほぼ完全に消失している。床 ほとんど消失しているが、ソフトロームまで掘り込んで、床面としている。周溝 北壁から北東コーナーまで掘られている(本跡はこれのみ残存)。炉 調査部分からは検出されず。貯蔵穴 調査部分からは検出されず。ピット 同左。覆土 暗褐色土の単一土層。遺物出土状態 僅かに残存した壁溝の覆土中から、土師器片が出土している。建て替え 認められなかった。備考 本跡は壁溝のみが残存し、他のほとんどを消失している。これは、背景に何らかの人為的行為、即ち削平などによる破壊が行われたと考えられる。そのため、重複関係の項目を「不明」とした。

出土遺物 出土総数は97点(古墳前期土師器77,石2,縄文土器4,弥生土器2,奈良・平安土師器8,須恵器4)。これらは、いずれもが小片であって、図化できるものはなかった。

11D (第18図)

位置 調査区西端で検出。東隣に10D。重複関係 単独。主軸方位 N-46°-W。平面形 方形を基調とする(未完掘)。規模 (2.80m)×(4.96m)、遺構確認面からの深さ0.58m。壁 垂直気味であるが、中段から上はややゆるやかに立ち上がる。床 ほぼローム掘り残しの直床で、他は貼床。中央部が硬化している。壁溝 調査部分では掘られている。炉 調査部分からは検出されず。貯蔵穴 東壁のP2が該当する。平面形はやや不整な円形を呈し、底面は概ね平坦。西隣のP5も、該当する可能性がある。ピット 3本検出。P1が主柱穴。P3・P4は補助的な柱穴。覆土 5層に分層できた。黒褐色土の2層でほぼ埋まっている。1層・2層がしまっているのに対し、壁際の4層と壁溝覆土の5層はしまりが無い。遺物出土状態 北壁の掘り方に貼り付くような状態で、高坏坏部が出土した。これは、4層の最下部とするよりは、むしろ廃屋に伴う上層解体直後に遺物を廃棄したもの、として解釈すべきと思われる。建て替え 認められなかった。備考 本跡の西側部分は調査区域外のため、未調査である。

出土遺物 (第18図)

出土総数は172点(古墳前期土師器167,石2,弥生土器3)。

1～6は土師器。1は装飾壺の肩部破片。細砂、長石、赤色スコリア細粒を含む緻密な胎土。㊸網目状捺糸文を帯状施文し、無文部を挟んで今度は端末結節の結節網文を区間に用い、網目状捺糸文を地文として施してから鋸歯文を描き、ヘラミガキを施す。この後に赤彩。㊹器面剥落が目立つ。今回は、同一個体である10D出土遺物も掲載した。南四東系弥生式土器の遺例が、顕著に認められる。

2は大埴。頸部以下が完存する。細砂、長石、スコリア細粒を含む緻密な胎土。㊸ハケナデ後、ていねいなヘラミガキ。㊹ヘラナデ。外面に赤彩を施す。

3は壺。胴下半～底部が残存する。砂、長石、赤色スコリア粒を含む胎土。ヘラケズリ後、ヘラナデ。㊸ていねいなナデ(指ナデ)調整を行う。

4・5は高坏。4は坏部が完存し、脚部の一部残存。細砂、長石、赤色スコリア細粒を含む胎土。㊸坏部はヘラミガキ、脚部ヘラケズリ。㊹坏部はヘラミガキ、脚部ヘラナデ。この後外面に赤彩を施す。

5は脚部のみが残存する。細砂、長石、赤色スコリア細粒を含む胎土。㊸ヘラケズリ後、ヘラミガキ。㊹ヘラケズリ後、ヘラナデ。外面に赤彩を施す。

6は器台。器受部～脚部が残存する。細砂目立ち、長石、スコリア細粒を含む胎土。㊸ナデ。㊹ナデ。全体に洗練された作りで、淡黄褐色に焼かれており、今回出土した器台の中では傑出している。

5 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、堅穴住居跡1軒及び溝1条であった。溝は北北西-南南東方向で、下総下位面側から間谷支谷側へ向かって、略直線状に掘られている。

(1) 堅穴住居跡

12D (第19図)

位置 調査区中央で検出。北西コーナー部分は、調査区を一部分拡張した。重複関係 単独。**主軸方位** N-36°-E。**平面形** 方形を呈する。規模 3.11m×3.00m。遺構確認面からの深さは0.54m。**壁** 中段までは垂直で、それより上はゆるやかに立ち上がる。床 貼床か。床面中央から南東にかけて硬化している。周溝 カマド部分と東コーナーを除いて全周する。カマド 北壁の中央部。火床部と煙道部が残存する。ピット 4本検出。床面中央やや西寄りのP3が主柱穴。P1は西壁中央壁際に位置し、出入口に該当する。覆土はハードロームとローム土が混じり、しまりあり。P2はいわゆる周溝(壁溝)内柱穴。P4はカマド下で検出した。カマド構築以前に掘削されたことは確実であるが、用途・機能は不明である。覆土 12層に分層できた。暗褐色土主体で、埋め戻しである。遺物出土状態 ほとんどの遺物は、3層中から廃棄された状態で出土している。建て替え 認められなかった。備考 本跡の埋没プロセスは以下のように還元される。

廃屋に伴う上層の解体→土砂の投棄(4層)→カマドの破壊(8層)→土砂の投棄(3層①)→一旦中断して土器類の廃棄→土砂の投棄の再開(3層②)→土砂の投棄(2層)→埋没。

これら一連の行為は、この家に住んだ人々によって行われたものと考えられる。

出土遺物 (第19図)

出土総数は109点(奈良・平安時代土師器6,須恵器2,古墳前期土師器100,石1)。

1は須恵器。甕の胴部片である。内外面とも灰褐色を呈する。砂、長石、赤色スコリア、雲母細粒を含む胎土。㊦器面が剥落し、不明。㊧ナデ調整。常陸産と思われる。

(2) 溝

01M (第19図)

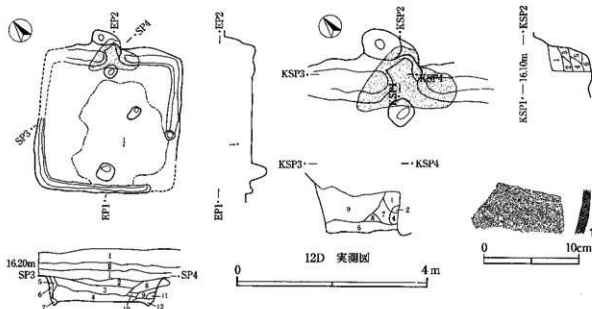
位置 調査区西側で検出。重複関係 08D及び10Dを破壊する。形状 ほぼ直線状を呈し、北北西-南南東の方向(N-63°-W)に掘られており、北端・南端ともに調査区域外へと延びている。全体的に幅員・深度とも比較的一定である。壁・底面 横断面形が「U字形」を呈する溝2条が重複している。古期の溝は浅く、底面に硬化面が認められる。古期・新时期とも、壁面・底面にピット類の施設及び遺構は掘られていない。規模 総延長(10.07)m, 最大幅1.93m, 深さ0.53m。覆土 最大で3層に分層できた。最上層は黒褐色土で、覆土の大半を占める2層は暗褐色土(ローム、黒色土の混合層)であって、しまっている。遺物出土状態 覆土中から散漫に出土している。備考 本跡は新旧2条の重複が認められる。古期の溝は、底面に帯状の硬化面が続くことから、道路として利用された形跡がある。

出土遺物 (第19図)

出土総数は131点(奈良・平安時代土師器5,須恵器6,縄文土器2,弥生土器8,古墳前期土師器113,土製品1)。このうち、土製品は古墳時代(おそらく前期の所産)の土玉の小破片で、図化しなかった。

2は須恵器。甕の胴部片である。内外面とも淡灰色を呈する。砂、長石、赤色スコリア、雲母細粒を含む胎土。㊦平行叩き目。㊧あて具痕が認められる。常陸産と思われる。

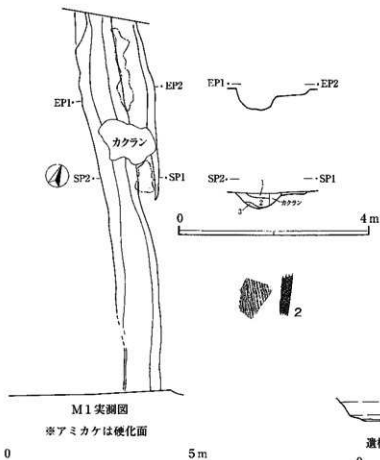
遺跡全体の表採遺物は58点(弥生土器28,古墳前期土師器28,石1)を数えた。第19図3は須恵器坏。体部~底部の1/4が残存。ロクロ成形で、体部下端ヘラケズリ。底部は切り離し後、ヘラケズリ。



12D土層説明

- 1 表土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 暗褐色土
 - 5 暗褐色土
 - 6 褐色土
 - 7 暗褐色土
 - 8 暗褐色土
 - 9 暗褐色土
 - 10 暗褐色土
 - 11 暗褐色土
 - 12 暗褐色土
- 1 暗褐色土、ローム混合層、砂子細かくさらさら
 2 暗褐色土、1層細粒、黒色土の混入がやや多い。
 3 暗褐色土、ローム混合層、1cm大ロームブロック混入、ややほそぼそ。
 4 暗褐色土、3層細粒、黒色土の混入がやや多い、2-3cm大ロームブロック混入、ややほそぼそ。
 5 暗褐色土、ローム土中に暗褐色土混入。

- 6 褐色土
 - 7 暗褐色土
 - 8 暗褐色土
 - 9 暗褐色土
 - 10 暗褐色土
 - 11 暗褐色土
 - 12 暗褐色土
- ローム土中に3-5cm大ロームブロック混入、ややほそぼそ。
 ローム粒混入。
 暗褐色土
 暗褐色土
 暗褐色土
 暗褐色土
 ローム土中に暗褐色土混入。



M1実測図

※アミカケは硬化面

12Dカマド土層説明

- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 暗褐色土
 - 5 暗褐色土
 - 6 暗褐色土
 - 7 暗褐色土
 - 8 暗褐色土
 - 9 暗褐色土
- 暗褐色土
 暗褐色土+ローム粒混合層、黒色土、焼上粒、暗褐色土少量含む。
 暗褐色土
 暗褐色土
 暗褐色土
 暗褐色土
 暗褐色土
 暗褐色土
 暗褐色土
 暗褐色土
 暗褐色土

M1土層説明

- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土
- 2mm大ローム粒含む。
 ローム、黒色土混入層、しまっている。
 ローム土中に暗褐色土含む。



遺構外出土遺物

※2・3

第19図 12D・M1実測図

第3章 成果と課題

旧石器時代及び縄文時代に関しては、第2章中で触れたため、本章では弥生時代以降を扱う。

1. 弥生時代の様相

弥生式土器について

10Dの第6図1～5は、床面密着ないしは床面付近より出土した土器群である。

第6図1の細口長頸壺は、「頸部横走文帯」として、頸部に無文部を挟み、縹描文を帯状施文したもので、東関東地域の足洗式系土器と捉えられる。このような属性は、小玉秀成氏が設定したところの、「箕山式」ないし「仮称原代式」に該当すると思われる（小玉2002）、時期的には弥生中期末葉に位置付けられる。本例の類似資料は、近隣を検索すると、印西市船尾白幡遺跡S1 076で出土している。

ただし10Dの時期は、同図2～5の胴部資料も検討すると、時間枠をやや広げて幅を持たせた形で、弥生中期末葉～後期初頭と位置づけるのが、現状では穏当と思われる。

同図6～20は、10Dの覆土下層より出土した土器群である。

同図6～8は頸部に縹描文を施し、宮澤久史氏分類の「A-1類（以下、宮澤分類）」に相当する。

複合口縁に縄文帯を施し、頸部無文帯、頸部下端区画として結節縄文帯、胴部は地文縄文として附加条縄文を持つ同図11は、宮澤分類の「A-2類」に相当しよう。

口縁～頸部に輪積み痕を残した同図16・17は、接合する胴部片は見つかっていないが、おそらくは附加条縄文が地文のものになる蓋然性が高い。こうした属性は、「臼井南式土器」に該当し、南関東系の「久ヶ原式土器」にはならないと考えられる。

宮澤分類「A-1類」・「A-2類」及び「臼井南式土器」は弥生時代後期前半あたりに位置づけられるもので、10Dよりも新しい。当該期の竪穴住居跡は、隣接する先崎西原遺跡でも検出されている。そうした後期弥生時代人によって、埋没過程にあった10Dに遺物（生活廃品）が廃棄されたのであろう。

なお、弥生時代全般に関して、宮澤久史氏の御教示及び資料提供を得た。記して謝意を表したい。

2. 古墳時代の様相

竪穴住居跡について

今回調査した竪穴住居跡は10軒であるが、調査区の間係上、完掘できなかったものが6軒と、約半数強を占める。とはいえ、本当に断片的で、属性がほとんど不明なものは、09Dの1軒のみである。

まず、規模的には、一辺が6mを超える大型のもの（07D・08D・11Dについては未完掘のため推定）と、4m前後の小型のもの（01D～06D）の、概ね二者が認められる。

形態的には、隅丸方形ないし方形を基本とし、これから逸脱するのは06Dで、やや胴の張る隅丸長方形を呈するものである。

さらに、内部構造の諸属性を加味した上で検討してみると、以下の三つのグループに大別される。

- 1類・主柱穴を持ち、周溝・炉跡・貯蔵穴を設けている大型の住居跡（07D）
- 2類・主柱穴を持たず、炉跡・貯蔵穴を設けている小型の住居跡（01D・02D・03D・04D）
- 3類・主柱穴を持たず、炉跡のみ設けている小型の住居跡（05D・06D）

該当例中の最多が「2類」で、「3類」を含めると、主柱穴を持たない小型の住居跡が大半を占める。エリア的には、調査区の西側に「1類」が位置し、東側には「2類」と「3類」が展開する。

ここに、本遺跡とも程近い、栗谷遺跡の分析を行った宮澤久史氏の見解¹⁾を紹介することにしたい。宮澤氏は、竪穴住居跡の諸属性を分析し、形態分類をした。これを、仮に「宮澤住居跡分類」と呼ぶことにする。同氏は、それを前提にした上で、

①・「A類(大型)」を中心として、「B-2類(小型)」数軒が、一つの単位となる

②・この住居形態の2類型は、栗谷遺跡近隣における古墳前期の基本的なパターンになる

ということを予察した。上記の「宮澤住居跡分類」に対応した場合は、本遺跡の「1類」が「A類」、「2類」・「3類」が「B類」に概ね該当する。今回の成果は、宮澤氏の予察を証明する事例となろう。

出土土器について

壺 裝飾壺・有段口緑壺・素口緑壺が見られた。裝飾壺は04D・011Dで出土し、前者は肩部に端末結節を回転施文しており、後者は肩部に網目状燃糸文を地文に、細沈線による鋸歯文を施したものである。有段口緑壺は03D・06Dで出土し、前者は口縁部の幅が狭く、段が明瞭で、後者は口縁部の幅が広く、段は形骸化している。素口緑壺は05Dにまとまりがあり、頸部に隆帯を廻らすもの、口縁端部にキザミ列を施文するもの、頸部に円形刺突列を廻らすものがある。その他、03Dで素口緑の小形壺が出土した。小形丸底壺 01～04・07・08・11Dで出土した。01Dは平底になるもので、02D・08Dでは器形がやや浅めの鉢形に近い。これら以外は全形が不明である。

大罎 02D・11Dで出土した。11Dは頸部のくびれが強いもので、やや古手になるか。

甕 遺構外に1点、台付甕の台部の小片が見られた他は、無台である。抽出・作図掲載分を問わず、甕が出土しない住居跡はない。内外面ハケナデ調整を施してから、底部付近などにヘラナデを施すものが多いが、04Dでは器内外面の最終調整が、ヘラナデである個体が含まれていた。その他、02D・07Dでは、口縁端部に裝飾(キザミ)を施した破片が出土した。

高坏 有段高坏・小形高坏が見られた。有段高坏は07Dで出土し、脚部が「ハ」の字状に開くもので、透孔を三孔穿つ。小形高坏は11Dで出土し、脚部の形状は不明。この他は脚部のみである。

器台 小形器台・異形器台が見られた。小型器台は01～04D・08・11Dで出土している(01Dは3個体)。そのほとんどは裾部径が器受部径よりも大きいもので、器受部がつまみ上げられ外面に稜を有する。器受部中央に孔を有するものがほとんどであるが、孔を有さないもの(03D)や、盲孔状のもの(11D)も含まれる。異形器台は07Dで3個体出土したが、いずれも器受部を欠損していて、全体の形状は不明。その他 鉢・瓶・ミニチュア土器が見られた。鉢は03Dで出土し、口縁内面に稜を有する。ミニチュア土器は、07Dから出土し、壺・鉢・坏を矮小化して模したものである。

時期 土器単体で捉えるならば、南関東系弥生式土器の系譜を引く裝飾壺が、古墳時代初頭に位置づけられる。そして、台付甕及び壺口縁端部に裝飾を施す甕もまた、高花宏行氏の編年(以下は高花編年)による高花編年Ⅰ期ないし、下がって高花編年Ⅱ期になろう。次に、各住居跡の時期を考えてみたい。

高花編年Ⅱ期(草刈編年Ⅰ期後半)

03D・05D ※ともにⅢa期にまたがる。土器のセットに古期のものが見られたことによる。

高花編年Ⅲa期(草刈編年Ⅱ期前半)

01D・07D・11D ※11DはⅢb期にまたがる。

高花編年Ⅲb期(草刈編年Ⅱ期後半)

04D・06D・08D ※06D・08DはⅣ期にまたがる。

高花編年Ⅳ期(草刈編年Ⅲ期)

02D ※Ⅲb期にまたがる。土器の廃棄状況から、廃絶の時期という意味合いが強い。

本遺跡は、高花編年Ⅰ期～Ⅳ期の時間内で、特にⅢa期・Ⅲb期を中心に築えたムラと考えられる。

地縁的な結びつきが強いムラ

本遺跡と保品支台に所在するおおびた遺跡は、間谷支谷を挟んだ「招呼の間」の位置関係にあって、ともに「千葉段丘」上を中心に集落を営んでいる点など、幾つかの共通点がある。第1図を見ると、「保品・神野遺跡群（上谷遺跡・栗谷遺跡・向境遺跡・埴堀遺跡）」や、村上宮内遺跡・村上向原遺跡・殿内遺跡・西山遺跡のように、支谷を挟んで比較的近接して遺跡が遺されている例が見られる。

これらは、各々が自営的に生業（主に農業）を行っていたムラと捉えるべきなのであろうか。

むしろ、地縁的な結びつきが強く、共同で支谷周辺の開墾や、「谷水田」の維持管理を行っていた村落群、換言すれば、「地縁的な共同体」として考える方が、自然ではないかと思われる。

例えば、本遺跡とおおびた遺跡の間には間谷支谷が介在するし、「保品・神野遺跡群」の場合は北に栗谷支谷、南には藤谷支谷が存在する。また、相女谷津・上相女支谷を囲む形で村上宮内遺跡・西山遺跡・村上向原遺跡・殿内遺跡が存在するのである。

当地域は、弥生時代後期に一旦、水稲耕作をメインとした経済基盤の確保という図式が廃れかけた。換言すると、後期弥生時代人達の「水稲耕作離れ」の現象²⁾が認められた訳である。

大谷弘幸氏の論考中³⁾の指摘にもあるように、平成15年の時点で千葉県内では、弥生時代後期の木製農具が検出されておらず、空白期となっていた。この点だけを見れば、弥生時代後期における千葉県では、今日に木製品が出土するような低地（低湿地）を、あまり積極的に農地としては開発・運営していない、という解釈が可能になる。しかし、一方で東京湾東岸の養老川下流域（市原市）や小櫃川下流域（木更津市）のように、弥生時代後期の水田遺構が検出されている地域が存在する。これらから垣間見られることは、「農耕社会」が大前提にあるとはいえ、後期弥生時代人達の経済基盤の多様性であろう。

即ち、水稲耕作に依拠し続けた地域（養老川下流域・小櫃川下流域など）と、水稲耕作が主体ではなく、それ以外の作物に依拠していた可能性が高い地域（当地域＝印旛沼周辺）という、二者の存在である。

大谷氏はまた、上記の論考中で古墳時代前期初頃は、農耕具の画期として捉えられることを指摘した。そして、その理由として

- ①「東海系の曲柄鍬」が積極的に導入されたこと
- ②「直柄鍬」を含めて、定型化した農具が作られるようになること

という、二つの事実が認められることを述べている。

このような背景を踏まえると、当地域でも古墳時代前期を迎えてから、再び本格的に水稲耕作を開始するようになったと捉えられる。そして、水稲耕作の「リスタート」にあたり、今度は治水事業を含めた「谷水田」の維持管理を、「近接するムラ同士」が共同で行うシステムが、生まれたものと思われる。

あくまでも村上台においては、という但し書きを付けて、遺跡群の分布と谷（支谷）の相関関係から、上記のような地縁的な結合がうかがわれる、ということを指摘しておきたい。その点では、専ら神崎川沿いの広大な低地を耕地として利用した、島田台（中でも平戸支台）の遺跡群や、同じく専ら桑納川及び新川沿いの低地を耕地とした、大和田新田台の遺跡群とは、状況が異なるという特徴がある。

近隣の事例であるが、印旛沼を挟んだ対岸の印西市西根遺跡では、戸神谷（戸神川の開析谷）の調査で、古墳時代前期の「堰」遺構が検出されている。このような「堰」の維持と管理、換言すれば農業用水の確保は、戸神谷を生業空間として捉えた場合、単一の集落（ムラ）が、独断的に執り行っていたのではなく、戸神川の水利を共有する、複数の集落（ムラ）が関わっていた可能性が高いと考えられる⁴⁾。

現に、戸神谷を挟んだ西側に鳴神山遺跡、東側には船尾町田遺跡、谷奥には一本松南遺跡が所在する。さらに、鳴神山遺跡と小支谷を挟んだ西側には向新田遺跡が所在し、戸神谷を挟んだ形で、周辺に古墳時代前期の大規模集落遺跡が集中していることが明らかである。

最後に、地縁的な集落の結合と、派生する問題を整理してみる。あくまでも、以下はモデルケースとして、諸段階を設定したものである。何ら日新しさが無く、かつ疎麻な点は御寛恕を乞いたい。

まず、水稲耕作が軌道に乗り、経済基盤が安定すると、集落を構成する単位集団の間に階層及び格差が生じてくる。即ち、ヒエラルヒーの明確化と顕在化である。その一つとして、「長（オサ）」の元には、次第に「富＝財」が集まるようになることが挙げられよう。

すると、今度は地縁的な結合における「共同体の長（オサ）」のあり方にも変化が現れてくる。そして、「富＝財」の集中により「長（オサ）」は、次第に「権力」と共に「権威」を得るようになって、さらに上位ともいえる「首長」へと格が上がりてゆく訳である。

最終的には、こうした「首長」が、畿内や東海地域との同盟関係を持つといったような、己が政治的なバックボーンを得ることによってはじめて、地域の支配者になり得るのであり、「古墳」を築造することが可能になるのではないかと考える。

ここに、上記の考え方を補完するような調査例があるので、紹介したい。

本遺跡とは本来的に台地続きで同一集落である、佐倉市先崎西原遺跡7号住居跡(古墳時代前期)から、実に「171点ものガラス小玉」が出土している。これは、単に「富＝財」の集中という事象に止まらず、「ガラス玉の首飾り」という、ある種の「宝器＝威信財」の所持、と解釈することができる。

このことから、古墳時代前期における南谷・先崎西原ムラの「長（オサ）」は、おおびたムラとの間の、言うなれば「地縁的な共同体の長（オサ）」であって、単なる「村長（ムラオサ）」よりも、さらに格が上位であった可能性が極めて高いと言えよう。

ただ、この「長（オサ）」は、「前期古墳」の被葬者にはならなかったことも、また事実である。

註

- 1) 宮澤久史 2003 「第3章 考察 第4節 古墳時代」『千葉県八千代市 栗谷遺跡 -第2分冊-』八千代市遺跡調査会 189頁 - 193頁
- 2) 一例を挙げると、大沢 孝氏は、『初級のついた土器も出土していることから、稲作の存在を否定することはできない。』とした上で、白井南式期の集落が内陸に営まれることが多いことから、棚田状の小谷の場合、谷津田では小規模な水田経営しかできないものと捉えた。他方で、水稲に変わるものとして、焼畑を行っていた可能性を指摘し、稲作耕作の方に比重が置かれ、広口の土器が多いことから、耕作対象物は「薯蕷（イモ類）」を想定した。また、紡錘車の出土例が多いことから、「布」の存在、即ち原料としての「麻織の栽培」をも税庫に入れた発言をしていた。
- 3) 大沢 孝 1984 「ドネ地方における北関東系と称される後期弥生式土器について」『史観』第14号 史館同人会 47頁 - 85頁
- 4) 大谷弘幸 2003 「第3章 木製農具の変遷と若干の問題」『研究紀要』23 財団法人 千葉県文化財センター 55頁 - 106頁
- 4) 他方で、田中 裕氏は、西根遺跡の「堰」は水上交通の利便性のために設けたもので、小河川（戸神川）の水位を調整するための機能を有する、と解釈している。田中氏の見解には根拠すべき点が多々あり、戸神谷で水山遺構が発見されていない現状においては、「堰の発見＝治水・灌漑事業の証明」とは即断せず、今しばらくの間は静観しておくことにしたい。同様に田中氏の見解に対しても、闇雲に賛同することはせず、今後の調査の中で慎重に検討しておくつもりである。
- 田中 裕 2005 「国家形成期における水上交通志向の村落群 -千葉県印旛郡西部地域を例として-」『海と考古学』海文史研究会考古学論集刊行会編 331頁 - 353頁
- 2007 「報告」『八千代は弥生文化の交差点』八千代栗谷遺跡研究会機関紙『やちくりけん』創刊号 八千代栗谷遺跡研究会 14 - 18頁

3. 奈良・平安時代の様相

検出遺構について

堅穴住居跡である、12Dの立地は「千葉段丘」上で、調査区域内ではただ1軒のみの検出であった。古墳時代前期以降では、少なくとも居住域として利用していなかった「千葉段丘」を、奈良・平安時代になって再び開墾するようになったと解釈できる。

溝01 Mは略直線状に、「千葉段丘」から北端は間谷支谷へ向かう形で、南端は「下総下位面」へと延びる形で、掘られている。古期の溝の底面には硬化面が見られ、道路としての利用も考えたい。そうすると、現在の市道とはほぼ平行しているということ自体が、何かしら示唆的なものがある。

土器類の出土状態について

12Dの出土遺物を検討すると、奈良・平安時代の土師器・須恵器として抽出できたものは、小破片がごく少量で、土器類の大半は前代の古墳時代前期の土師器小片であった。

ここから想定されるのは、廃屋に際して使用可能な土器類(うつわ)を、ほとんど跡形も無く移動先(近場か遠方かはともかく)へ持ち去ったということである。第2章で記したように、12Dは廃屋後に埋め戻しており、そのうちの3層中に土器類が廃棄されていた。そして、土器類の廃棄のため、埋め戻し行為を一旦中止している。土砂投棄の再開後は、完全に埋め戻して「更地」状態に還すことで完了となる。重要なのは、これら一連の行為を、「第三者」ではなく、そこに住んでいた「住人」が行っていることと捉えられることである。前代の土器片の混入に関しては、埋め戻しのための土砂を掻き集めた際か、住居を掘削した際に掘り出していたものであるかは、不明とせざるを得ない。

12Dを含め、遺跡全体から出土した土師器は、古墳前期のものを除けば、そのほとんどが奈良時代の所産で、須恵器もまた同様の結果であった。

以上、弥生時代～奈良・平安時代までの、本遺跡における土地利用の歴史について触れてみた。

参考文献

- 秋山利光 2007 『勝田大作遺跡』 八千代市遺跡調査会
- 安達 新他 1975 『おおびた遺跡 - 八千代市少年自然の家建設地内遺跡 -』 八千代市教育委員会
- 糸川道行他 2004 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVI - 印西市船尾(白幡遺跡) -』
財団法人 千葉県文化財センター
- 加藤修司 2000 『第1章 上層編年案』 『千葉県文化財センター 研究紀要』 21
財団法人 千葉県文化財センター 13頁～42頁
- 小玉秀成 2002 『通井遺跡の板井式土器 - 板井式土器の南ドと阿玉台北式および周辺型式の設定 -』
『玉里村立史料館報』 Vol. 7 玉里村立史料館 53頁～82頁
- 小林信一他 2005 『印西市西根遺跡 - 県道船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 -』
財団法人 千葉県文化財センター
- 榊原弘二 1999 『主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書 - 八千代市南遺跡・富南遺跡 -』
財団法人 千葉県文化財センター
- 藤 淳・ 1998 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1 - 八千代市烏田込ノ内遺跡 -』
財団法人 千葉県文化財センター
- 高花宏行 2001 『印旛地域における古墳時代開始期の土器様相』 『印旛郡市文化財センター 研究紀要』 2
財団法人 印旛郡市文化財センター 111頁～139頁
- 寺里和久他 2001 『先崎西原遺跡』 財団法人 印旛郡市文化財センター

写 真 图 版



遺跡遠景



02D遺物出土狀態



01D遺物出土狀態



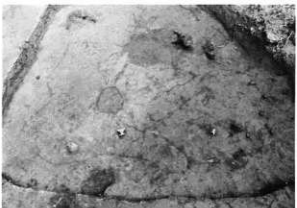
02D完掘



01D遺構内推積貝層



04D遺物出土狀態



01D完掘



04D完掘

图版 2



03D完掘



07D完掘



05D完掘



07D炉跡



06D遺物出土状態



08D完掘



06D完掘



09D完掘



10D遺物出土状態



12D完掘



10D完掘



12Dカマド完掘



11D完掘



01M完掘

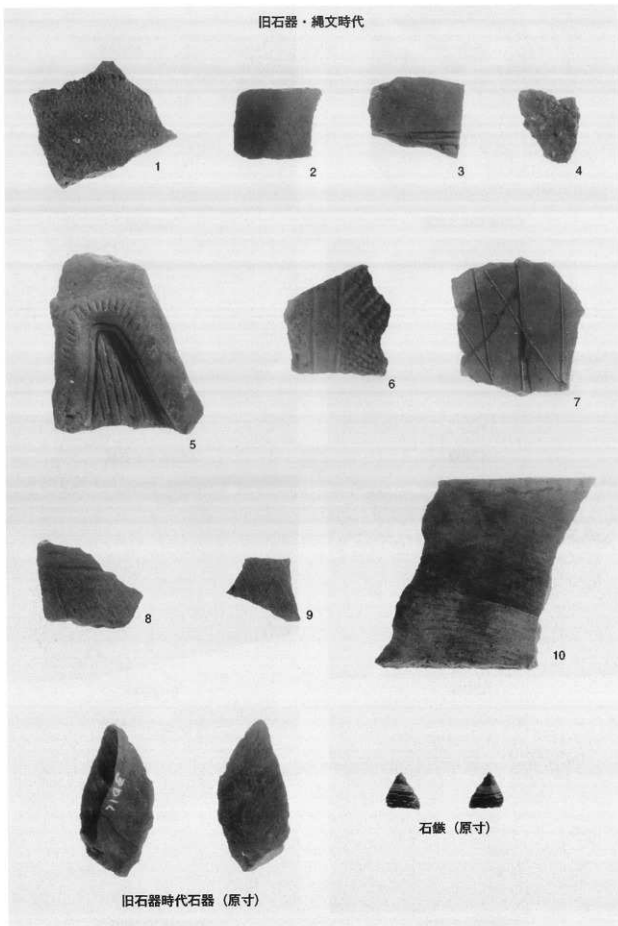


12D遺物出土状態

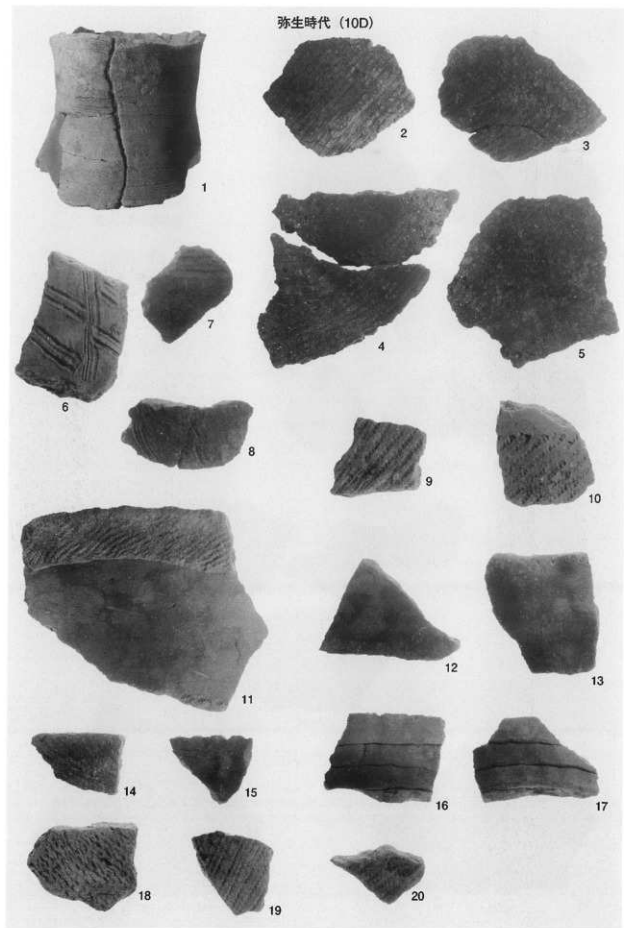


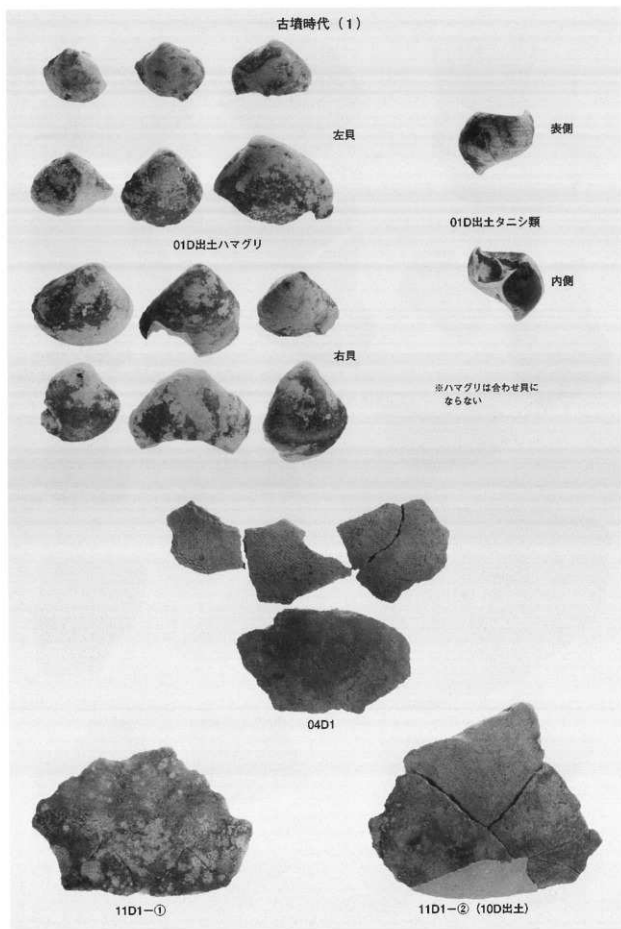
01M断面及び硬化面

旧石器・縄文時代



弥生時代 (10D)





古墳時代 (2)



05D1



05D2



05D3



03D4



03D1



03D3



03D6



03D9



03D10



03D12



03D11



01D4

古墳時代 (3)



01D1



01D3



07D11



07D12



07D17



07D19



07D13



07D14



07D15



07D16



11D2



11D4

古墳時代(4)



04D2



04D8



04D7



04D9



04D5



08D3



04D10



08D5



02D5



02D4

報告書抄録

ふりがな	ちばげんやちよし みなみやいせき はつくつちようさほうこくしょ
書名	千葉県八千代市 南谷遺跡発掘調査報告書
副書名	霊園進入路の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
編著者名	森 竜哉 中野 修秀
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 ☎047(483)1151代表
発行年月日	2009年12月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なごいでいりや 南谷遺跡	ちばげんやちよし みなみやいせき 八千代市保良字南谷 1246番2 他	12221	270	35度 45分 7秒	140度 8分 46秒	19940606 ～ 19940713 19971203 ～ 19980331	546㎡ 309㎡	霊園進入路建設に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南谷遺跡	包蔵地	旧石器時代		石器(ナイフ形石器)・礫片	千葉段丘面に展開する古墳時代前期を中心とした集落の調査。
	包蔵地	縄文時代		縄文式土器(早期～後期)	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 1軒	弥生式土器(中期・後期)	
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 10軒	古墳時代前期土師器(壺・甕・鉢・埴・器台・高坏)	
	集落跡	奈良時代・平安時代	竪穴住居跡 1軒 溝 1条	奈良・平安時代土師器・奈良・平安時代須恵器	

要約	<p>今回の調査成果は、以下のとおりである。</p> <p>本遺跡は、「千葉段丘」上に営まれた古墳時代前期を中心とした集落である。時期的には、高花宏行氏の編年であるところの、「Ⅲa期・Ⅲb期」が主体となる。</p> <p>竪穴住居跡が10軒検出されたが、1例を除き、重複関係を持たないものであった。遺構密度が高く、本来は同一遺跡である。佐倉市先崎西原遺跡(下掘下位面)の調査例を合わせると、比較的大規模な集落が存在していた可能性が高い。</p> <p>奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒及び溝1条が検出された。</p> <p>岡谷支谷を挟んだ対岸には、古墳時代前期集落を検出した「おおびた遺跡」が位置することから、有機的関連の有無などに関しては、今後の検討課題となろう。</p> <p>その他の時期としては、弥生時代中期末葉～後期初頭の竪穴住居跡1軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒及び溝1条が検出された。</p> <p>遺構外遺物として、旧石器(ナイフ形石器)・縄文式土器(早期～後期)・石器(石鏃)が抽出でき、本遺跡の土地利用史を物語る。</p>
----	---